江戸前ホスト

あきチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
江戸前ホスト

【Ｎコード】
Ｎ７２８５Ｎ

【作者名】
あきチャン

【あらすじ】
駄目ホスト光。顧客を助けようとした結果、異世界に飛ばされてしまいました！！
飛ばされた先は江戸村という、江戸時代から取り残された街。
帰る方法を探しつつ食べる為に働く光。どうせなら大きい事業を起こそうと奮闘します。光は沢山の人達に支えられながら成り上がって行き、新しい日本の歴史を作ってしまいます。（作者歴史に弱いので、本物の歴史的表現は出てきません。）良かったら読んで下さい＞（＿＿）＜

出会いの章（1）（前書き）

はじめまして！あきチャンです。
お立ちより頂き感謝です。
更新は遅いかも知れませんが、途中で投げ出さない様頑張ります！！
宜しくお願いします。

出会いの章（1）

「うぇ…気持ち悪ぃぃ…。」
二日酔いのムカムカ、喉の渇き…目も重くて開けたくない。
俺、また飲み過ぎたのか…体中が軋んでるよ。

そういえば昨日は、俺の少ないの指名客の一人、麻美が来てくれたんだっけ。
何か無茶苦茶な飲み方をしていて…俺も付き合って…その後どうしたんだけ？
うーん、あんまり覚えてないや。
俺は、とにかく喉の渇きを潤そうと起き上がろうとした。
フカフカの布団に手を付いて…ん？何か肌触りが…？

うっすら湿った芝生の様な…それでいてガサガサしていて…何時もと違う。
俺は、重くて仕方ない瞼を開けた。

「こっ……、ここ何処だ？」
見慣れない風景。辺り一面草木のみ。
俺、酔っぱらって野宿しちゃったのか？うわぁ最悪だ。
見れば俺の一丁着のスーツに染みが出来ている。
「クリーニング出さなきゃな…。」
何気に高いクリーニング代を気にしながら立ち上がる。
「よぃっしょ！……痛っ。うわぁ、頭痛ってーー！！」
立ち眩みと酷い頭痛に襲われる。まぁ何時よりチョイ強烈。

フラフラと歩き出し、自宅に帰ろうと辺りを見回すが、草木ばかり

だ。
「ったく、俺って何処まで来たんだ？」
都内にこんな自然が残っている事にも驚いていたが、
いくら歩いてもアスファルトを発見出来なかった。
家に帰るなら、まず道路を発見しなくては。

しかし…いくら歩いても道路どころか、街頭すら発見出来なかった。
でも、獣道だが人間が歩いている形跡はあった。
キチンと草木が切られ、身体に当たる事無く先に進める。
でも整備されてる…には程遠い出来。
しかも坂…きつい！山道かよ！！……って、もしかして…ここって山？
もしかして俺、酔っぱらって山まで来ちゃったのか？
俺は胸ポケットに手を突っ込み、財布を取り出す。
1、2、3、4…金が減って無いって事は、自力で？山まで？…あり得ない。
歌舞伎町のど真ん中から山まで歩いて来たって事？あり得ないだろ！！
とにかく人里でも見つけなきゃ！山奥だって駐在さん位居るだろうし。
登山とか知識無いけど…とにかく山を降りなくては！

腕時計によると、今の時間は…1時。日が出てるから午後の一時だな。
早く帰って出勤しなければ！！

2時間ほど山を下ったが、人に逢う所か民家すら無かった。
傾斜が少なくなってきた事から、けっこう下って来たと思ってるけど…。
腹も減ったし、喉なんてくっ付きそうだ。

苦労して買ったブランドの靴が泥だらけだし…最悪。
帰ったら病院に診察にでも行った方が良いかもしれない。
だって、尋常じゃないだろ！
いくら酔っててても、こんな山奥まで自力で来るなんてあり得ない！！
……そうだよな、あり得ないよな。
正直感じてたんだ。俺、誘拐でもされたんだろう。
資産は持ってない。実家だって普通の家庭。って事は、客絡みか？
起きた時、スーツは汚れてたけど、靴はピカピカだった。
自力で昇って来たなら靴だって汚れている筈。
やっぱ俺、誘拐されたのか。
でも、一体誰だ？恨みを買った覚えは無い。
そっそうだ！レスキュー出動をお願いしてみよう！！
俺は携帯を取り出す。……けっ圏外じゃぁーー！！
少々自棄になりながら道路を探していると、ふと光る何かが見えた。
光りに反射している物の傍に近寄る。
そこには…真っ赤なハイヒールとハンドバックが落ちていた。
何か…見覚えがあるなコレ。
……っあああーーー！！！思い出した！！
テレビでホストという存在を知った俺は、良い女、良い車に憧れ上京。
自分なりに一生懸命頑張ったが、一向に芽は出なかった。
勤め始めて2年目が経ち、後輩には抜かされ、同期には置いて行か

れ…
正直地元に帰ろうかと思っていた。
そんな時知り合ったのが麻美だった。
そんな太客では無いが、毎週の様に通ってくれた彼女。
彼女は借金返済の為、泡嬢の仕事をしていた。
人形の様な可愛らしさとテクニックで、店のＮＯ．１だった。
借金返済もあり、飲んでいく金額こそ少なかったが、
俺は、客の中でも彼女との時間を一番楽しんでいた。
何時もは大人しい酒の飲み方をする彼女も、昨日は少し荒れた飲みをしていて…

俺は身体を考え、ホストの身ではあったが…少し控える様に勧めた。
でも彼女は聞く耳を持たなくて、仕方なく俺も一緒に飲み始めたんだ…。
二人で閉店まで飲み続け、泥酔した彼女を自宅まで送ろうとした時の事だった。

店の前にタクシーを呼び、車に乗り込もうとした瞬間、低い男の声が後ろから聞こえた。
「おい！麻美！！」
振り返れば如何にもサラリーでないスーツを身に纏う、金髪ロン毛マッチョ男。
何気に美男子でムカついたが、どうやら彼女の借金回収に来た様子だった。

「…彼女に何の様ですか？」
俺は解っていたが時間を稼ごうと会話を振る。
「俺は麻美の昔からの知り合いだ。貸した金を返して貰おうと思ってな！！」
やはり借金取りだ。

「…麻美さん。起きられますか？」
「うーーん…気持ち悪いし…お金なんか…無いし。」
半分眠っている彼女が答える。
「てってめぇ！！今日は返済日だろ！！金も無い女がホストなんかで飲んでんじゃねぇ！！」
金髪ロン毛は乱暴な手つきで彼女の手首を掴む。
「ちょっ乱暴は辞めろ！！」
暴力反対平和主義人間な俺だが、流石に引く訳にはいかない！！
俺は、男の手を振り払い、金髪ロン毛と睨みあった。
彼女も俺たちのやり取りで目が覚め、身体を震わせていた。

「金返せないなら…俺にも考えがある。」
「なっ何よ！！」
「取り合えず泡の掛け持ちだな！！寝る間も惜しんで働け。
それに、俺のボスもお前と一回楽しみたいって言ってるしな。
……取り合えず俺と一緒に来いよ。」
強引に彼女を連れて行こうとする。
「手を離せ！！！」
こっこんな怖そうな男に怒鳴った！！腰が抜けそうだ！！
でも、流石の俺も引けない！！
俺は金髪ロン毛の分厚い胸を思いっきり付き飛ばし、上に覆いかぶさった。

「はっ早く逃げろ！！！」
俺は麻美に向かって叫んだ。
「うっうん！！また連絡するね！！ありがと光！！」
俺の源氏名を叫びつつ、一目散に逃げた。
「くそっ！！ふざけんなぁー！！」
当然マッチョに勝てる筈もなく付き飛ばされた。
「このアマ！！待て！！」

俺の事なんか見向きもせず、金髪ロン毛は麻美を追いかけて行った。
俺も流石に放っておく事も出来ず、二人の後を追いかけた。
麻美は走りにくかったんだろう、ハイヒールとハンドバックが道に落ちていた。
俺は道しるべを拾いながら二人の後を追った。そして…
ハイヒールとバックのお陰で、俺は二人の元に着く事が出来た。

金髪ロン毛は麻美の腰を掴み、自分の肩に担ぎあげている所だった。
やばい！！拉致監禁強制労働ぉぉぉーーー！！

「まっ待てよ！！」
俺は足を震わせ、金髪ロン毛に叫んだ。
金髪ロン毛はゆっくり俺の方を向き、イケてる顔で俺に睨みを効かせた。
「あぁぁん？お兄さん、何か様？忙しいんですけど…。」
ふっっと不敵な笑みを浮かべる金髪ロン毛。むっムカつく！！

「あぁ…麻美さんを離せ！！警察呼ぶぞ！！」
素早く国家権力に頼る俺。
また不敵な笑みを浮かべ、金髪は俺に近づいて来る。
俺はだらしないファイティングポーズを取り、迎え撃った…れた。
金髪ロン毛は、俺のパンチより遥かに早いスピードで攻撃をしてきた…。
鈍い大きな痛みが顔面を襲う。なっ殴ったな！！殴られた事ないのに！！
俺は跪き、顔を両手で押さえた。
そんな俺の横を、金髪ロン毛は麻美を抱え、優雅に歩いて行った。

「まっ待て…。」

少々勢いは無くなったが、俺も麻美を見殺しには出来ない！
再び金髪ロン毛に向かって行った。
「兄ぃさん、しつこいよ？」
俺の方を向こうと体勢を変える…瞬間、俺は金髪ロン毛にタックルを先制！
「うわっ！！」
流石の金髪ロン毛も倒れた…麻美を抱えながら。
ヤッヤバイ！！麻美担いでたのに！！！

しかも、良く見れば後ろには道路工事途中のカラーコーン！
ご丁寧に大きな穴まで！
このままだと麻美まで穴に！怪我で済まないかも！！！

俺は麻美だけでも引っ張ろうと手を伸ばす。
麻美も俺に掴まろうと手を伸ばす。

そうだ…全部思い出した。
俺は結局麻美を捕まえられず、二人は穴に落ちて行ったんだ…
そして俺も勢い良く手を出したお陰で、一緒に落下しちゃったんだ…。
俺…情けないなぁ…
って、穴に落ちた筈なのに、何で山の中？
もしかして、助けに来た金髪ロン毛の仲間に、拉致&放置されたのか？

でも、なんで離れた場所に靴やバックが？
もしかして拉致った連中が落したのか？
ってか、凄い労力だな…俺の事担いで山昇ったのか？
こんな所、車でなんか走れないし…なんか、腑に落ちないな。

今は原因を考えても解らん！！
とにかくどうにかしてココを抜け出さないと！！

俺はその後も山の中を彷徨った。
正直、自分が遭難していたのは解っていたが、喉も乾いた、腹も減った…歩くしかなかった。
もしやと思い麻美の鞄も開けてみたけど、中には化粧品やら香水やら…
俺の空腹を満たしてくれる物は無かったんだ。

もう…汗も出ないよ。
俺は山の中に倒れ込んだ。
気付けば空は薄暗く、時計を見れば6時になっていた。
今日は取り合えずココに寝て、明日また歩こうと野宿を覚悟した時、
俺の耳に音が聞こえた。
そう…微かに水音が聞こえたんだ。

「みっ水…。」
俺は音の方へ走りだす。
みっ水！！ちょっと汚れていても構わない！とにかく水が飲みたい！！
経験した事のないハイテンションを感じ、一心不乱に走った。

いきなり開けた場所に出たっと思ったら、目の前には美しい小川が流れていた。
「みっ水ぅぅぅぅーーー！！」
俺は小川の中に顔を突っ込み、息をするのも忘れ水を飲んだ。
「……ぶはぁぁーー！！美味ぁぁーーい！」
生き返るってこういう事かと思った程染みわたる水。

味も悪くない。喉が渇いていたからとか関係なく、その小川の水は美味かった。
夕焼けにキラキラ光る小川…。なんて綺麗なんだ…。
俺は、川縁に腰を降ろし、一息ついた。
煙草に火を付け、深く吸い込む…ふぅぅぅーーー。…疲れた。
煙草を吸い終わると、一気に身体に疲れが襲いかかった。

「あーぁ、無断欠勤しちゃったよ…俺、首かなぁ…。」
俺は疲れ切って目を閉じ怒っている店長を思い浮かべる…。
そして俺は潤った身体を横にして、川縁で気絶する様に眠ってしまった。

翌朝、俺は眩しい朝日に起こされた。
電気、消し忘れたか？
……あぁ、そうだ。俺は拉致&放置されたんだ。
産まれて初めての野宿。ふーん、腹さえ一杯なら悪くは無いな。

俺は水を腹一杯飲み、また歩き始めた。

もしかして、川沿いなら民家が有るんじゃないか？
俺は川に沿って歩く事にした。

そして…俺の感は的中したんだ。

川沿いに汚い小屋を見つけた。
人が住んでるとは思えなかったが、連絡機器は有るかもしれない！！
俺は小屋に駆け寄った。

「失礼しまーす…。どなたか御在宅でしょうか…。」

俺は簡素な扉を開ける。…誰も居ない。
最初、山小屋か船でも保管している場所かと思っていた。
でも、中は狭かったが布団や窯がある事から、人が生活している様だった。
もしかしたら資料館かとも思ったが、こんな場所に造っても意味が無いと悟った。

それに…なにやら食材らしき物が置いてある事や、テーブルが置いてある事から、
やはりここは、人様のお宅の様だ。
しかし、このハイテク時代にこんな家がまだ存在しているとは…凄いな。
ってか、俺が知らないだけで、山奥の家って皆そうなのか？

俺は固定電話を探した。
…無い。ってか、この家は文明拒否でもしてるのか？
電化製品が一切無い！冷蔵庫もテレビも、電灯すら設置されてない！
山奥すぎて電気来ないのか？
とにかく、俺は家で住民の帰りを待った。
ここの住民に脱出方法を聞く為に…。

夕方になり、人の声がしてきた。どうやら住民が帰ってきたようだ。
扉がソーッと開かれる。

現れたのは５０代位の夫婦だった。
俺は帰宅する道を聞こうと話しかけようとしたが…ビックリして声が出なかった。
なんでビックリしたかというと…夫婦の服装だった。
時代劇に出てくる様な汚いボロ着物を身に纏っている。

奥さんの手には籠、旦那の背中には薪…。
あぁ！退職して田舎暮らしってヤツか？ここまで徹底してるとは…。

「あっあのぉ…どなた様で？」
旦那が話しかけてくる。奥さんは旦那の後ろに隠れて俺を見ている。
「あっ勝手に上がってすみません。俺、遭難しちゃったみたいで…。」
「はぁ…。」
「んで、帰り道を教えて貰いたくて待ってました。あの、ココって何処なんですか？」
「こっココかぇ？ここは江戸村の外れだが…。」
えっ江戸村？…って何処だ？
「江戸村ですか？あの、何県ですか？」
「なにけん？なにけんって何だ？」
この旦那、馬鹿にしてるのか？
「あの、都道府県を聞いてるんですけど。」
「とっとどうふけぇ？なんだそりゃ…。お宅、異国の人かぇ？頭も茶ぁこいしなぁ…」
この旦那…茶髪も見た事無いのか？天然？ボケ？喧嘩売ってる？

「あの、もう良いんで。帰り道だけ教えて下さい。」
怒りを抑え、にこやかに笑い聞きだす。ホストで良かった。
「はぁ…お前ぇさんは何処に住んでるんだ？」
「はい。歌舞伎町です。」
「かっかぶき？何処だそれ…。」
歌舞伎町…本気で知らないのか？
「あの…本当にもう良いんで、駅とか交番とか教えてもらえませんか？」
「疫？高…はん？お前ぇさんの言葉は解らんなぁ…ニッポン語話せんのか？」

「あの…勝手に家に入ったのは謝ります。でも、俺も本当に困ってるんです。
助けてもらえませんか？」
「そりゃ、袖振り合うのもってな！助けてやりてぇが…お前ぇさんの言葉が解らん。」
「だから！！……本気で言ってるんですか？」
「はぁ？あったり前ぇだ！俺は冗談は好きだが、人を困らせるのは性じゃねぇや！！」

この旦那…本気で言ってるのか？
「あの…俺、東京に行きたいんですけど…。」
流石に首都位解るだろ！！
「はぇ？とうきょう？何処だ？」
あっ…頭にくる男だ。
「うーん、解んねぇ。すまねぇ兄さん。そのかわり明日先生の所に連れてってやるよ！！」
「はぁ？先生ですか？」
「あぁ。俺が野菜届けてる先生だ。子供に学問を教える偉ぇ先生だ。」
まぁ、この男よりマシか…。

「そうですか…。あの、今すぐという訳には？」
「はぁ？今から山降りたら、俺が家に帰ってくるのは朝になっちまう！！そいつは無理だ。」
「そこを何とか…。」
早く帰らなくては！！流石に二日も無断欠勤は出来ない！！
出勤は無理でも連絡しなくては！！
「すまねぇ…兄さん。今から山歩くなんて危険すぎて無理だ。」
「……そうですか。解りました。」
しょうがないか…ここで怒らせて帰れなくなったらもっと困るし。

「そのかわり、今日はココに泊まって行け！飯位出させろ！！」
旦那が俺に向かって言う。
まぁ、小屋でも野宿よりはマシか？
俺は素直に礼を言い、一晩御厄介になる事にした。
「あの、御名前は？」
一晩厄介になる以上、名前位聞いておかないとな！！
「俺は弥平。こっちはツルだ。お前ぇさんは？」
「俺は光って言います。」
「光かぁ。珍しい名前だな！！やっぱ異国の人は違うな！！」
「いや…日本人ですよ！！」
「日本人？いやぁ、お前ぇの頭、茶色だし、言葉は解んねぇし…まぁどうでも良いか！！」
どうでも良いなら…俺も何回も説明するのは面倒なんで。

「何も無くて…すみませんが。」
ツルさんは俺に食事を出してくれた。
茶碗に白いご飯。上には一枚の沢庵…のみ。
「おぉ！！張りきったな！」
弥平さんは満足そうにツルさんを褒めた。
…飽食の時代ですよね？でも、こんな暮らしをしている二人だし…。
「ありがとうございます！頂きます！！」
無いよりマシと思い、口に運ぶ。

俺が食べるのを満足そうに眺める弥平さん。
「あの…お二人は食べないんですか？」
自分たちはニコニコ見ているだけで、食事をしていない。
そんな食べ辛い視線に耐えられず話しかけたんだ。
「あぁ。俺たちはもう食った！！なぁツル？」

「はい。沢山！！」
「そうですか。では遠慮なく。」
俺は一気に口の中に放り込んだ。

食事が終り、ツルさんは布団を敷いてくれた。
俺は布団を一つ宛がわれ、夫婦は一つの布団に眠った。
正直薄っぺらい布団だったが、野宿より快適ではあった。
早く家に帰りたい。美味い飯食いたい…。
そんな事を繰り返し考えながら眠りに就いた。

深夜、俺は物音で目が覚めた。
隣に視線を向けると…夫婦は居ない。
土間を見ると…夫婦は水を一心不乱に飲んでいた。
ツルさんはお腹を擦っている。弥平さんはお腹をグーグー鳴らしている…。
もしかして…夫婦は食事をしていなかったのか？
見るからに貧乏だし…少ない米を俺にくれたのか？
そうだとしたら…俺は何か誤解をしていたかもしれない。
俺をからかう弥平さん…実は凄く良い人では？
それに…からかったんじゃ無くて、本気で言葉が解らなかったのか？
俺は…人を見る目が無いな…。
有難う弥平さんツルさん。

翌朝、俺はすっきり目が覚めた。
夫婦は既に起きていて、ツルさんは窯の前に立ち、
弥平さんは胡坐で楊枝を咥えている。
「おう！光ぅ。良く眠れたか？」
「はい。お陰さまで。」
「じゃぁ、早く飯食って先生の所に行くぞ！！」

「はい。」
そこにツルさんが昨日と同じ食事を出してくれた。
茶碗一杯の白い米…夫婦にとっては大事な食糧だろうに…
「すみません。頂きます。」
「おぉう！遠慮せずに食え！！」
嬉しそうに進める弥平さん…お腹がまだ鳴ってますよ？
本当にありがとう二人とも。
俺は一粒一粒大事に食べ茶碗をツルさんに返す。

「じゃぁ、行ってくるな！！」
「はい。御気を付けて…。」
ツルさんは深く頭を下げ見送ってくれている。
俺はツルさんに挨拶を済ませると、財布の中から二万円を渡した。
本当は全部渡したかったけど…流石に帰り賃は残さないと…。
「ツルさん、御世話になりました。少ないですけどお礼です。」
「……あの、これは何に使う道具ですか？」
札の匂いを嗅いだり、裏返してみたり…不思議そうに眺めるツルさん。
「あの…偽札じゃないですよ？」
「にせさつ？何ですか？」

そっか、わかった！！この夫婦は仙人だな！！
いや、そんな事ないか。一緒に山を下りてくれるみたいだし。
札で買い物する土地じゃないのか？不思議な場所だな。

「じゃぁ、お礼にコレを受け取って下さい。」
勝手に麻美の鞄を漁り、箱に入った口紅を手渡した。
「あの…コレは？」
「口紅です。すみませんこんな物しか持ってなくて…。」
「まぁ！！紅ですか？」

嬉しそうに顔を緩めるツルさん。
「でも…これはどうやって使うので？」
俺は箱を受け取り、封を外し、キャップを外し、実際にツルさんに付けてあげた。

俺が再びツルさんに口紅を返すと、ツルさんは嬉しそうに川へ走って行った。
川を覗き込み、嬉しそうに自分の顔を見ていた。
「すまねぇ…本当に良いのか？紅なんて高価な物…。」
弥平さんは俺を顔を見ている…。
「勿論！こんな物しか持ってなくてすみません。」
「いやぁ！紅なんて高価な品を下さって…ツルの顔なんか…垂れ下がりやがって…。」
心底嬉しそうにツルさんを眺める弥平さん。

「おぅっと！すいやせん！！先生の所にご案内致しやす。」
弥平さん…言葉使い変わってませんか？

俺は弥平さんに連れられ、やっと山から脱出出来た。
先生のお宅は町中にあるらしい。
俺は弥平さんの後を追い、町と呼ばれる場所に入って行く。

そこは…俺が思い描いていた町では無かった。
俺は近代的なビルを想像していたけど…ビル無いじゃん！！古い民家だけ！！
一軒一軒が重要文化財並みに古い。
しかも、すれ違う人全員、着物を着ているじゃないか！！
しかも…！頭がチョンマゲなんですけどぉーー！！
アマゾンの奥地に来るより衝撃を受けた。

次第に人も増え、ドラマで見た様な光景が広がった。
綺麗に整備された古民家。出店もある。
ちょんまげ頭＆刀の男たち、着物で小包持って歩く女…。

ここは…一体何処だ？
弥平さんは江戸村って言ってたし…まさか…まさかまさかまさか！！
江戸ですかぁーーーーーーーーー！！！

出会いの章（2）

俺が連れられてきた町は、俺が良く知っている江戸に似ていた。
歴史の授業で習った…徳川が世を治めている時代の日本に酷似している。
まさか…この時代にこんな場所が残っていたなんて…。

「あの…弥平さん？」
「はい？何でしょう。」
「この江戸村って、江戸時代の造りにそっくりですね！！ビックリしました。
ここって、テーマパークか何か何ですか？」
「はぁ？また光さんは意味の解らない事を…。」
「いや…この世の中に、まだこんな街並みが残っていたなんて凄いと思って…。」
「残ってる？面白い事を仰いまさぁね。ここは世の中の中心。江戸村ですぜ？
徳川様がお納めになってりらっしゃる城下町って奴ですよ！
もしかして…光さんは城下に来られたのは初めてで？」
「じっ城下？徳川って…将軍様ぁーー？」
俺は興奮して声を荒げる。
「はぁ。御殿様は徳川家吉様ですぁ。まさかご存じ無い訳じゃぁ…？」
家吉…家吉？そんな将軍居たっけか？
「まぁ、とにかく先生の所へご案内いたしやす。」
俺は弥平さんの後を付いて行った。

…変な気分だ。
まるで歴史の教科書に飛び込んでしまった様な光景。

最初はテーマパクかと思ったが、山だったり弥平さん家だったり…。
テーマパークにしては非常にリアル過ぎた。
それに、入場料も払ってない。出口も書かれてない…。
もしかして、あの工事の穴に落ちて…タイムスリップしたって事かぁ？
いや…そんな非現実的な事が起こる訳無い…。
もう、何が何だか分からない！！！

それに…道を歩いている人が俺を明らかに避けている。
化け物でも見る様な目付きで…気分悪いな。
でも…皆着物だし、俺だけスーツだし。髪も茶髪だし。当然か？

俺は悶々と考えながら、弥平さんの後を付いていく。
俺は、駅やバス停、交番などを探しながら道を歩く。
でも、全然見当たらなかった。本当にこの町には存在しない様だ。

弥平さんはいきなり立ち止まり、喋った。
「お疲れ様でやした。先生のお住まいはここです。今先生に声掛けてくるから待っててくだせぇ。」
弥平さんは、屋敷の中へ入って行った。

待つ事一時間。それそろ俺も中に入ろうと思った時、弥平さんが出てきた。
「お待たせいたしやした！先生が会って下さるそうで。」
「…あの、先生ってどんな方なんです？」
「へぇ、先生は背が高くて髪も長い。異人さんの様な顔をしてらっしゃいます。
　すこし静かな先生ですが、何でも相談に乗って下さいやすよ？さぁ、先生の所へ…。」
俺は弥平さんに案内されて屋敷の中に入って行った。

俺と弥平さんは縁側に腰を落とし、先生という人物が現れるのを待っていた。
しばらくすると、先生と言う人物が現れた。

「お待たせしました。」
そこに現れたのは、漆黒の長い髪の彫りの深い美男子だった。
「あっ先生！こちらがさっき話した光さんでさぁ。」
先生は俺を上から下へと舐める様に眺めた。
「じゃぁ、あっしはコレで失礼致しやす。」
「あぁ。御気をつけて…。」
「へぇ。すんません。」
弥平さんは深々と頭を下げた。
「弥平さん！色々有難うございました。」
俺は弥平さんに深々と頭を下げ見送った。

いきなり二人きりにされ、正直戸惑ったが、一刻も早く帰り道を聞かなくては！
俺が話を切り出そうとした瞬間、先生が先に喋り出した。
「光さんは、一体私に何を聞きたいのですか？まぁ大体は弥平さんから聞いていますが。」
「はい。俺…歌舞伎町に帰りたいんですけど、帰り途が解らなくて…。」
「歌舞伎町…ですか？……あぁ…懐かしい響きだ。」
「せっ先生！！歌舞伎町ご存じなんですね！」
良かった…。やっと言葉の通じる人が！！

「えぇ。良く知ってますよ？私も働いてました。」
「働いて？先生なのに？」
「まぁ。ここでは先生以外仕事が無かったので。」

確かに風俗産業がある町には見えないな。
「それで先生、帰り道なんですが。一体どうやって帰れば良いんでしょう…。」
俺は逸る気持ちを抑えて切りだす。

「……。まぁ、答えは簡単です。一言で言えば…無いですね。」
「そうですか！良かった……えっ？今何て？」
聞き間違いか？
「ですから、帰り道なんて存在しませんよ？残念ですね。」
「…無いって、どういう意味ですか？貴方、歌舞伎町で働いてたんですよね？」
「えぇ。１０年前程に…。」
「だったら、場所知ってるじゃないですか！」
「場所は知ってますが…。あの、光さんは自分の置かれた現状、解ってますか？」
「はぁ？それ位解りますよ！」
「では、話してみて下さい？」
俺は、穴に落ちる少し前から今に至るまで、事細かく説明した。

「……んで、今先生の前に立ってますが…何か変ですか？」
先生はフゥッっと息を吐き、話し始めた。
「光さんは一番大事な事が解ってませんよ？
光さん、江戸村に違和感感じませんでしたか？」
「まぁ。アトラクションにしてはリアルだし、皆着物だし背も低いし…
何より街並みが歴史で習った江戸時代にソックリですよね。」
「まぁね。でもアトラクションでも無いし、似てる訳でもありません。
この江戸村は…貴方が知ってる江戸時代だと考えて下さい。」
「…はい？あんまり意味が解んないんですけど…。」

「だから、解りやすく言えば、ここは江戸時代その物なんです。」
その物？益々意味が…。

「先生…本当に意味が解りません。」
正直に申告。
「もう！頭の固い人ですね！だから、貴方が今いるこの場所は江戸時代なんですよ本物の！！」
「江戸時代？まさかぁ！！」
穴に落ちたら江戸時代でした？映画じゃあるまいし。でも…もしかしたら？

「先生、今日は何年の何月何日ですか？年号は？」
「今日は２０１０年。９月１３日です。年号は…慶長４１５年です。意味解りますか？」
「あの…今平成ですよね？先生…間違ってます。」
「いえ？間違ってません。そういえば…私が江戸村に来る少し前に年号変わりましたね。
　そうだ…平成でしたね。でも、平成は上の世界での年号ですよ。ここは慶長です。」
市町村で年号が変わるなんて聞いたこと無いぞ？それに…上の世界って？
「あの…先生？上の世界とはどういう意味ですか？」
「言葉の通りです。この江戸村は地上とは…まったく別の空間です。
　私も最初は戸惑いました…。目が覚めたら異世界に来てしまっているなんて…。」
「いっ異世界ですか？」
異世界って…パラレル何とかって奴か？

「ココは、地上とはまったく別の空間に存在する…もう一つの地球の様な場所です。

そして…私も貴方の様に穴に落ちて…この江戸村という空間に来てしまったんです。」
「…タイムスリップって事ですか？」
「いえ？違います。ここは江戸時代に似ていますが、江戸時代ではありませんよ。
しいて言えば…」
「しいて言えば？」
「江戸村は、江戸時代から切り離され、侵害される事無くそのまま残った、
もう一つの江戸時代って感じですかね。」
「ちょっちょっと待って…頭が…。」
混乱しすぎて解らない…。
「まぁ、最初は戸惑うでしょうね。いきなり異世界に飛ばされたんですから。」

「先生…ここはパラレルワールドって事ですか？」
「あっ！そんな簡単な言葉ありましたね！すみません。」
「まっマジですか？」
俺…異世界に来ちゃったのかよ…。
普通なら信じないだろうけど、俺の三日間の体験を考えれば…。
本当に俺はパラレルワールドに来てしまったんだな。

「光さん？他のお友達は何処に居るんですか？」
「へっ？俺は一人ですけど？」
「でも、穴に落ちたのは三人ですよね？なら他の二人の江戸村に来てるんじゃ？」
「そっそうなんですか？」
「いや、江戸村で上の住民だった人に会うのは初めてなので…。でも、そう考える方が自然でしょ？」
「まぁ…確かにそうですね。……あの、先生もパラレルしちゃった

んですよね？
　帰る方法…本当にご存じ無いんですか？」
「…知ってたら、とっくに帰ってますよ。こんな娯楽の無い町なんて…。」
確かにその通りだ。
「まぁ、気持ちが落ち着くまで私の家に泊まっていて下さい！」
「はぁ…すみません。」
帰れないのか…俺。

俺たちは家の中に席を設け、座りながらゆっくり話をした。

先生の名前は祥さんというらしい。
俺と同じ元ホストで、店のＮＯ１だった様だ。
ある日、アフターしている時、酔っぱらいに絡まれ突き飛ばされた所、穴にピットイン。
気が付いた時には江戸村に来てしまっていたそうだ。
暫くは帰る方法を探す毎日だったが、結局見つからず、この江戸村で生きていくと決めたらし。
だから俺にも悪あがきせず、この江戸村で生きていく覚悟を決めろとアドバイスを貰った。
やっぱ諦めなきゃ…駄目なのか？

俺は暫く先生の家に厄介になる事にした。
だって…野宿はもう勘弁って感じだったし…江戸村の金も持ってないし…。
仕事が見つかり、生活が落ち着くまで居ても良いって言ってくれたし。
ってか、他に行く所も無いしな！！
先生の家ではご飯を腹一杯食べる事が出来た。ちゃんとオカズもあ

る。
でも…大盛り茶碗を見ると…弥平夫婦の事が思い出される。
あの二人…ご飯食べられてるかな。このご飯…分けてあげたいな。
そして俺は久しぶりに風呂に入り、身体を洗った。
フカフカの布団を敷いて貰い横になる。

…俺、異世界に来ちゃったんだよな。
帰りたいな…家に帰りたい。
それに…やっぱりまだ信じたくない気持ちも残っている。
仕事なんて探す、心のゆとりが無いのが正直な気持ち。

あっそういえば…先生は俺と一緒に麻美と金髪ロン毛も来てるかもって…
金髪ロン毛は放っておいても、麻美が来ていたとしたら…探さなくちゃな！
よし！明日から麻美を探してみよう！

出会いの章（3）（前書き）

久しぶりの投稿です。

出会いの章（3）

翌朝、俺は早速麻美を探そうと街に出かけようとした。
でも先生改め祥さんに止められ、祥さんの勧めで着替え一式を借り着替えた。
まぁ、確かに今の俺の格好は目立つ。
背も街の人達よりかなり高いし、髪の毛も茶髪。服は黒のスーツ。
こんな格好で街に出かけたら…斬られるかも！こえー！
本当なら髪の毛も染め直したい所だが、そんなものある訳無い。でもスキンヘットは無理。
仕方ない…伸びるまで諦めよう。

町人風衣装に着替え、街に繰り出す。
・・・・・うん、昨日より明らかに注目されてない。溶け込んでる？
これなら探しやすそうだ！
俺は、街の中をキョロキョロと麻美を探して歩き回った。
しかし…足が疲れ、日も暮れはじめても麻美は見つからなかった。
麻美…白と黒のスーツを着て髪の毛は茶髪。この街ならかなり目立つだろうに…
もしかして俺と一緒で、山の中で遭難でもしているのか？
どうしよう、それだったら町中を探す意味が無い。
今日は帰ろうか…
っと思っていた時だった。

「きゃー！誰かーー！」
黄色い…じゃなくて、助けを求める女性の声が聞こえた。
何だ？っと振り返った。
見れば数人の人だかり。
俺は遠巻きにその様子を眺めていた。触らぬ神に祟りなし！

次第に人だかりは増えて行き…様子を伺う事も出来ないほどになっていた。
御役人風の人も駆けつけ…事件の香りがする。
俺は気になって仕方ない。ちょっとなら…見ても平気だよな？
ソロソロと人だかりの中に突っ込んで行った。

一人の女性が蹲っている。
「どうしよう…どうしよう…」
ブツブツ青ざめた顔でうわ言を言っている。
何が起こったんだ？気になって仕方ない！
俺は、隣に立っている中年男性に声を掛けた。
「あっあの、何があったんですか？」
「いやぁ、何か大事な物を取られたらしいんだ。スリらしい。」
「スリ？何か盗まれたんですか？」
「あぁ、御嬢さんの慌てっぷりからすりゃー、高価な物なんだろうなぁ。気の毒に。」
「へぇ、どの時代にもあるんですね。」
「へ？何だって？」
「いっいえ、何でもありません。」
引ったくりかぁ、気の毒だな。
被害女性が役人に何やら犯人の特徴を伝えていた。
大柄で眉間に大きな黒子。髪は薄く、鼠の根付を持っていた…
白い布に包まれた物を取られたと言っている。
ふーん、中身は大切な物だったんだろうなぁ…
触らぬ神に祟り無し！ここはヤジ馬根性を抑えて一旦祥さんの家に帰る事にした。

どっぷり日も暮れた街角、俺は祥さんの家に急いでいた。
手に提灯でも持ってれば良かったが、生憎何も持ってない。
少し怖い真っ暗な道を、俺は早歩きで突き進む。

あと二つばかり角を曲がれば祥さんの家だという場所まで来た所で、
俺は中年の男性と肩がぶつかった。
「ちっ痛ぇなー！」
何だか穏やかでない口調。おっ俺が悪いのか？
「あっすいませーん。」
何だか腑に落ちなかったので、軽ーく流す。
「はぁ？人にぶつかっといてその態度は何だぁ？喧嘩売ってんのか！」
男は逆切れしてきた。
ってか、俺余所見してた訳じゃないしお互い様だろ？
でも…俺ってぶっちゃけ喧嘩滅茶弱なんだよね。
「いや…別に喧嘩なんて売って無いですけど？」
「てめぇーの態度がむかつくんだ！謝れ！」
「はぁ？何で俺が謝るんですか？これってお互い様ですよね？」
「ってめー！馬鹿にしてんのか！」
男は胸元から、キラッと光る物を取り出した。なっナイフ？
いや、この時代ならドスとでも言うのだろうか？
って、どうでもいい！今の俺は大変に危険だ！
こんなのに刺されたらバイ菌で死んじゃうだろ！
医療の進んでないこの時代じゃ確実に死ぬ！！
「てめー、覚悟しやがれ！」
男はドスを構え、俺を刺す気満々だ…絶体絶命！
なっ何か俺も道具を出さないと！
えっと、今何持ってる？
祥さんから貰ったお小遣いと…電波の無い携帯位だ。
貰ったお小遣いは少しだし、こんなの渡しても逆効果だろう。
けっ携帯なら？……携帯でどうやって攻撃するんだ？
麻美の画像が入ってる携帯、探すのに便利かと思って持ってきたけど…
そっそうだ！

「こっこいつが目に入らぬかぁー！」
俺は印籠の如く、携帯電話を男に刺し向けた。
「……はぁ？何だそれ。」
「こっコイツがお前の命を吸いとるぞーー！」
俺は男に向かって写真を撮った。同時にフラッシュが眩く光る。
「ぎゃぁーーーー！よよよ、妖術だぁーーーー！御助けーー！」
あの態度は何処に行ったんだ？
ガタガタと身体を震わせ地面に蹲る男。
ふっ、科学の勝利だ。

んっ？何か落ちてるぞ？
男が屈んだ時に落したのか？これは…ねっ鼠の根付！
これって確か…引ったくりの…
俺は、さっき撮影した写真を確認する。
今までは周りが暗くて分からなかったが、写真には確かに映っていた男の特徴。
眉間の黒子！！
こっこいつが犯人だ！

「おっおい！」
「ひぃぃぃ！御助けーー！」
「おい！話しを聞け！」
「ひぃぃ。いっ命だけは！」
ビビってる男、命乞いをしてきた。
魂を取られたとでも思ってるのか？
でも、コレってラッキー？

「おい、貴様の命を返してやらんでもない。」
「へっ？まことで？」

「あぁ、俺の言う事を聞けばな！」
「へぇへぇ！何でも聞きます。聞きますから！」
「じゃぁ、お前が今日人から盗った物を返すんだ。」
「へっ？何でそれを？」
「俺は妖術が使えるんだ。何でもお見通しだ。」
「ひぃ！てっ天狗様ですか？すっ直ぐに持ってまいります！」
「ここで待っているぞ？逃げたら…分かってるな？」
「へぇ！わっ分かってます！いっ急いで！！！」
男は何回も転びながら走って行った。

しばらくして男が戻ってきた。
「てっ天狗様、持ってまいりました！」
「ではそれを、盗った人に返すんだ。」
「へっへぇ…でも天狗さま、俺誰の物盗ったか…わかりません。」
「はぁ？分からないだって？」
「すっすみません！もう二度とやりません！！」
男は盗品をその場に置いて走り去って行った。
足元には大量の盗品。
財布や金、茶碗に布…まぁ、よくもこれだけ盗んだなぁ…

俺は仕方なく盗品を必死に抱え、祥さんの家に戻る事にした。
この盗品は祥さんに相談して持ち主に返してあげよう。

出会いの章（3）（後書き）

これからは真面目に投稿できそうなので、よかったら読んで下さい

＞（　）＜

出会いの章（4）

「祥さん！今帰りました！」
怖そうな男に勝利した余韻で、俺は上機嫌で祥さんに話しかけた。
「おや、随分ご機嫌ですね？」
「いやぁ、聞いて下さい…」
俺は祥さんに事の顛末を話した。

「へぇ、そんな事があったんだぁ…でも注意しないと危ないよ？」
思ってもみない言葉だった。
「あっ危ないって？」
「あのね、いくら本物の江戸じゃないって言ったって、生活環境は江戸その物と言って良い。
　変に現代文明をだしても、魔女狩りじゃないけど殺されるかもしれない。」
「そっそんな物騒な！まさか殺されるなんて冗談ですよね？」
「…そうでもないんだよ？時代が時代だから…まぁ、身分の高い人達に気に入られれば…」
「身分の高い？」
「あぁ、例えば城に勤めている侍とか…
　妖術使いじゃなくて祈祷師といて捉えて貰えるかもしれない。」
「あぁ、陰陽師みたいな？」
「そうそう、そんな感じ。まぁ、それは置いておいて、友達は見つかったのですか？」
「…いえ、手掛かりすらありませんでした。」
「そうですか、残念ですが気を落さないで？きっと見つかりますよ！」
祥さんは俺を励ます様に笑顔を見せる。

「一つ聞きたいんですけど、祥さんなら先生じゃなくてもっと仕事があったんじゃ？」
「何故？」
「だって、現代文明を生かせば何か他の人と違う仕事できたんじゃ？
先生より儲かる仕事。」
俺じゃないけど、祥さんだって陰陽師風になれる筈。何でしないんだ？
「…まぁ、そうでしょうね？でも…あるのは知識だけ。上からは何も持ってきてないんです。」
「そうなんですか？だって俺は服とかバックとか…持ってこれましたよ？ってか、
祥さんは何で江戸村に来ちゃったんですか？」
「そういえば話してませんでしたね？何故私が江戸村に来てしまったか…」
祥さんはそう言うと、悲しそうな顔で続きを話し始めた。

「私が来たのは１０年前。恋人と至福の時間を過ごしていた時でした。」
「恋人と？至福って…まさか。」
「ふふっ。そう、愛し合っていた時です。その日は大風が来てましてね…。」
祥さんは俺に江戸村に来てしまった理由を話してくれた。

祥さんと恋人の女性は、結婚の約束をしていたらしい。
でも祥さんはホストだし、相手の女性は大金持ちの財閥で一人娘。
当然親に反対され、掛け落ち同然で同棲生活をしていた。
そして祥さんはホストを辞め、日中の仕事を始めたらしい。
ある日の深夜、突然の台風が襲ってきて節約の為に住んでいたボロアパートは倒壊。
死んでしまう！っと思って目を深く閉じ…気が付けば江戸村に来て

いたそうだ。
裸一貫で江戸村に来てしまった祥さんは、その変に干してあった衣装を拝借し街を放浪していた。
何とか帰る術を探していた祥さんは、ある親切な人と出会い、食べる為に、この教師という仕事を紹介され就いた。

しばらくは変わりない日々だったが、突然訃報が祥さんに届いたんだ。
祥さんは教えられた場所に行くと…そこにあったのは変わり果てた恋人の姿だった。

腐敗の様子から死んだのは祥さんが江戸村に来た日辺り。
裸で傷だらけ…何があったかは想像がつく。
祥さんと同じように裸のまま江戸村に来てしまった彼女は、夜盗に襲われる。
弄ばれた揚句に放置され…死んでしまったのだ。
祥さんは酷く悲しみ、食事もとらず、毎日自分も死ぬ事だけを考えていたらしいが、
職を紹介してくれた人に励まされ、この江戸村で生きて行く決心をしたらしい。

祥さんは立ち上がり、一番奥の部屋にあった大小二つの箱を持ってきてくれた。
「こっちの大きい方は私の恋人…妻の遺骨だよ？ほら美里…挨拶して？」
俺の前に遺骨を差し出す。
俺は気の毒な遺骨に手を合わせた。
「こっちの小さな箱は？」
祥さんに尋ねた。
「こっちの箱は…私の子供だよ？」

「こっ子供？」
「あぁ、彼女は私の子供を妊娠していたんだ。もうすぐ産まれそうだったのに…」
祥さんの痛みが心に流れてくる。

「そんな辛い出来事が…」
「あぁ、当時は本当に死んでしまいたかったんだ。
でも彼女を上で待ってる両親に合わせてあげたくて…俺は生きて行く決心をしたんだ。」
「そうなんですか。…あっ！だから俺の他にも江戸村に来た人が居るって言ったんですね？」
「あぁ、私もそうだった。なら君にも一緒に来てる人が居るんじゃないかって思ってね？」
「そっかぁ。俺も早く麻美を見つけないと！」
「おや？マッチョ男は？」
「あれは…どうでもいいんです！」
「…ぷっ。」
俺の言葉に祥さんが笑う。
良かった。

「祥さんは、その恩人さんの為に教師をしているんですね？」
「そうです。食べる術を教えてくれ、私に生きて行く勇気をくれた人だから…」
「そうですか。俺にとって恩人は、弥平さんにつるさん、そして祥さんですね。」
「私は何もしてませんよ？ただ自分の経験を語っているだけで…」
「いえ、俺にとっては心の支えです。同じ時代を知っていて同じ価値観で話せる人。
唯一安心出来る場所ですよ。」
「ふふっ、何だか照れますね。」

祥さんの顔に余裕が戻り、俺は一安心だった。
でも…本当に早く麻美を見つけないと危険だな。
せめて何処かで隠れていてくれれば…

「でも、何も手掛かりが無いのはキツイですね？少しでもヒントがあれば…」
「そう思って携帯を持ち歩いていたんですが…麻美の写メが有る方がいと思って。
　でも使わない方が良さそうですね？」
「あぁ、辞めた方がいい。他には？」
「えっと…探すのに役立ちそうな物は無いです。」
「そうですか…。」
「明日は俺が江戸村に来た時倒れていた場所に行ってみようかと思ってます。」
「ほう、それは良いかもしれません。私は仕事で行けませんが…大丈夫ですか？」
「あっはい。道は簡単だったので大丈夫です。」
「そうですか。でも余り遅くならない内に帰りなさい？」
「はい。分かりました！」

俺は与えられた部屋に戻り、一日の疲れを癒そうと布団に入った。
でも…祥さんから聞いた話が頭の中で映像に変換され流れてくる。
愛する者を二人同時に失った悲しみ…想像もつかない。
早く麻美を見つけてやらないと…

翌日、俺は倒れていた場所に麻美を探しに行った。
たとえ見つからなくても、何か手掛かりもあるかも知れないし。
でも…何一つ見つからなかった。
今日は一旦帰ろうかと思って、山を下っていた時だった。

もうすぐ街という所まで来た俺の耳に、聞いた事のある…どなり声が聞こえてきた。
「くぉのののーーー！待てよオイ！！」
「ひぃ！おっ御助けーー！」
「ってんめーー！俺からスリなんて１０００年はえぇーんだよ！」
「とっ盗った物はお返ししますから！助けてーー！」
「ふん、弱ぇー癖にイキがってんじゃねー！…もうスリなんてやるな！」
「へぇへぇ！やっやりません。やりませんからーー！」
「ちっ、失せろ。」
バタバタと足音がする。
へぇ、自分から物を盗った奴を逃がしてやるんだ…何気に良い奴。
でもこの声…聞いた事ある様な？
俺は確かめる様に、草むらから覗いてみた。

視線の先には、この世界には居る筈が無い容姿が仁王立ちしていた。
汚れてはいるが、あり得ないほど派手なスーツで、髪は金髪でロン毛。
服がピッチピチな程の荒々しい肉体…こっこいつ！
「金髪…ロン毛。」
思わず言葉に出てしまった。

金髪ロン毛は俺の声に気付き、俺の方に視線を向け近づいてくる。
やっヤバイ！こいつには文明も通じないし、喧嘩も勝てない！
きっ木の棒…木の棒は無いのか？せめて道具！！
…周りに無いもなーい！！
「おい、誰か居るのか？出てこい！」
声を低くして話しかけ来る。

「にっニヤァーー！」
思わず猫の鳴き真似。
「ふん、猫か。」
良かった。誤魔化せた？
「…って、こんな太い声の猫が居てたまるか！さっきの野郎の仲間かぁ？」
そうですよね。俺自身も猫の真似はキツイと思ってました。
「…俺だよ。俺。」
観念して姿を現す。

「…おっお前は…ホスト…」
「なっ何だよ！俺…何も盗ってないぞ！！」
「…や。」
「やっ？」
「やったぁ…やったぁぁぁーーー！」
んっ？何か変な反応だ。
「なっ何だよ？」
「おっし！やっと話しの通じる相手が居たぜ！あぁーーー良かったぁ！」
「何だお前…」
「いやぁ、俺正直心細くてさぁ。穴に落ちた筈なのに気付いたら知らない場所でさぁ。
話しかけても相手にされないし、役人みたいな奴に追いかけられるしさぁ…
仕方なくこの辺に隠れてたら、今度はスリだぜ？何なんだよ此処。」
何だか大変だったらしい。

「…此処は江戸村っていうらしいぞ？」
「江戸村…日光か？」

「あぁ、そういえばそんなレジャー施設あったな。でもレジャーじゃ無い。リアルだ。」
「…はぁ？意味わかんねぇ。」
「俺たちの時代から取り残された街…それがこの江戸村だ。
文化は実際の江戸時代と同じだ。タイムスリップみたいな感じか？」
「タイムスリップ…だと？」
「あぁ。でも２０１０年なのは確か何だが…」
「よっ良く分かんねーけど。んで何でお前はそんなに詳しいんだ？江戸村ってのについて。」
「詳しくは無いけど…俺は親切な人に出会って教えて貰ったんだ。」
「親切な人？誰だそれ。」
「俺達より１０年も前にこの江戸村に来た人、祥さんって言うんだ。」
「祥だと？」
「あぁ、祥さんに話しを聞いて知ったんだ。この世界の事。」
「そっか、んなら俺にも会わせろよ。その祥って奴に。」
「…やだよ。」
「んだとぉ？」
「そっそんなぼっ暴力的な奴に会わせられる筈ないだろ！」
身構える俺。

「…わかったよ、もう殴んねーよ。だから会わせろ。」
「…本当か？」
「あぁ。」
「本当だな？」
「しつけー！！殴んねーって言ってんだろ！」
こっ言葉だけで怖ぇぇー。
「わっ分かったよ。会わせるから…」
「よし。分かれば良い。早く行こうぜ？」

「あぁ、こっちだ。」
俺は金髪ロン毛と並んで祥さんの家に向かった。

「祥さん、今帰りました。」
「おぉ、お帰りなさ…おや？この人は？」
「お前が祥か？」
いきなり失礼な男に、俺は精一杯の威嚇を込め睨んだ。
金髪ロン毛は、分かったよと言わんばかりに唇を噛んでいた。
「ははははっ元気のいい若者ですね。その容姿からして…光くんと一緒に来た人ですね？」
「あぁ、そうだ。あんた１０年もここに住んでるんだろう？」
「えぇ、そうですよ？」
「なら、帰る方法を教えてくれ！」
「…知ってたら私も帰ってますよ。」
「知らねーのか？」
「えぇ、残念ながらね？」
「んだよ。使えねーな。」
こっこいつ本当に礼儀知らず！
思わず足を蹴っ飛ばす。

「なっ何だよ！殴ってねぇだろ！」
「お前の態度だよ！折角会ってくれてんのに何だよ！」
「この！やんのか？」
「あぁ、やってやるよ！カカッテコイ…」
カタカナなのは俺の動揺の表れだ。でも此処で引いたら男じゃ無い！！

「まぁまぁ、取り合えず今日はゆっくり休んで明日また対策を考えましょう？」
「しっ祥さん…」

「ちっ飯あんのか？」
ここに泊まる気か？こいつ。
「ふふっ、沢山食べなさい？さぁ上がって。」
「あぁ、遠慮なくごちそうになるぜ？」
泥だらけの靴を脱ぎ、座敷にドカドカ入って行く金髪ロン毛。
こいつを連れてきたのは失敗だったか？

出会いの章（４）（後書き）

ロン毛との合流。
話しが動きだしそうです。

出会いの章（5）

金髪ロン毛は本当に遠慮なくご飯を胃袋に納めて行く。
「ふふっ。お腹が空いていたんですね。ほら、こっちも食べなさい？」
「おぉ！はっ早くよこせ！！」
祥さんから皿を奪う様に引き寄せ、瞬く間に空にしていく金髪ロン毛。
「おっお前、少しは遠慮しろよ…あぁ！俺のオカズー！」
油断していると、俺の食いものまで無くなりそうだ。

見事に出された物を食いつくした金髪ロン毛は、〆とばかりに味噌汁を一気に飲み一息つく。
「…っ。ぷはぁーー！ごちそうさん！食ったぁー！」
「だろうな…。」
「ふぃー。久しぶりの飯だった所為か、こんな質素な飯でも美味く感じたぜ！」
「おっお前なぁ！…って、まさかお前、ずっと食って無かったのか？江戸村来てから…。」
「あっ？んまぁ…その辺の畑から失敬したりはしたが…生はキツかったな。」
「って、お前が役人に追われてたのって…畑泥棒だからじゃないのか？」
「んー、かもな。」
「かっかもなってお前なぁ…」

俺と金髪ロン毛の話を面白そうに聞いている祥さん。
「祥さん、笑ってないで何かコイツに言ってやって下さいよ！」
「んっ？そうですか？では…君は何て言う名前なの？」

「しっ祥さーん…。」
「あっ？俺の名前か？まだ言って無かったな。俺は武(たけし)だ。郷田　武。」
「ほう、武さんですか。宜しくね武さん。」
「ごうだ…たけし…。ぷっ。」
「なっなんだよ！何がおかしいんだよ！」
名前を聞いて噴き出した俺に、武は何かを感じて怒りだした。
「だっだって！同名じゃん！ドラ〇もんのジャイ◎ンにさぁ！」
「いっ言いやがったな！この！」
どうやら武のコンプレックスは名前の様だ。今度何かあったらフルネームで呼んでやろう。

祥さんは俺たちに風呂を勧めてくれた。
どっちが先に入るか喧嘩になりそうだったが、今日の所は武に譲ってやった。
まぁ、久しぶりの風呂だろうし…武…めちゃ汚れてたし。

武が風呂から上がり、俺もサッサと入浴を済ませた。
さっぱりした俺が与えられた部屋に戻ると…部屋中に大鼾が木霊していた。
「…ぷっ。すげー鼾！こいつ…疲れてたんだろうなぁ。」
俺は弥平さんや祥さんに救われたからマシだったけど、こいつは一人だったんだもんなぁ。

翌朝、眠い目を擦り布団から出た。
居候の分際で言えた事ではないが…祥さんに言って部屋を変えて貰おうか。
一晩中…ってか今現在も五月蠅いコイツと同室だと、確実に睡眠不足になる…
俺は布団を端に寄せ、身支度を軽く整え祥さんに挨拶に行く。

「お早うございます祥さん！」
「おや、早いね。」
「あっあはは…。武の鼾が五月蠅くて寝れませんでしたよ。」
俺は呆れているんだと言わんばかりの顔で祥さんに愚痴った。
「ふふっ、彼も疲れていたんでしょう。なにせ何も分からない場所に一人で過ごしていたんですから。」
「あーっ、まぁそう言われると…。」
「大目に見てあげて下さいね。」
「祥さんは…本当に優しいんだなぁ。」
「困った時はお互い様でしょう？」
「祥さん…有難うございます。」
「あっ、光君。今日も彼女を探しに行くんですか？」
「あっはい。勿論です。」
「そうですか。でも昨日も手掛かり一つ見つからなかったんですから、ただ闇雲に探すのも…」
「はい…実は俺も思ってたんです。ただ辺りをうろついてるだけで見つかるかどうか…。」
「多分見つからないだろうね。でも今のところ…死体が出たって話も聞かないしから…」
「しっ死体って！！」
「ごめんごめん。でも何も聞かないって事は何処で生きてるって事でしょ？
しかも変わった服を着ているから彼女は目立つだろうに、今のところ目撃話しも聞かないし…
もしかしたら彼女は自分の意思で何処かに隠れている可能性もあるよ。
なら歩き回って見つかる訳は無いだろう？」
確かに言われてみればそうだ。
俺たちが着ている服は、この江戸村では目立つ。
女性だし服を脱ぐなんて事はしないだろうしなぁ。

でも…そんな事を思いつく祥さんは凄いなぁ。しかも祥さんの口ぶりって…

「…祥さんって情報ツウなんですね？」
目撃話しって、叔母ちゃんの会議じゃないんだから…
「そうですか？まぁ仕事柄相談に来る人から情報を手に居れるなんて事もありますし、
役人達が情報交換に来る事もありますしね？」
「うわ、なんか危険な香りがします。」
「ふふっ。別に危ない事をしてる訳ではないですよ？安心して？」
「あはは、祥さんに限って心配なんて！…でも、隠れているかも知れない奴なんて、
一体どうやったら見つけられるんでしょうか。」
「うーん、難しいね。そこら辺に張り紙する訳にはいかないし…」
「張り紙…駄目ですかね？」
「そりゃ駄目だろう。君は何て書くんだい？変わった服を着た女性を探してますって？
そんな張り紙を街中にしたら役人がやってくるよ？」
「あぁ…そうかも。ただの携帯の光で驚くんだから、全身異世界の服を着ている彼女は間違いなく捕まりますね。」
「うん、多分ね。君は自覚が無かっただろうけど、二人とも捕まる寸前だったんだよ？
役人が相談に来てたもん。あの変わった服を着ているのは何者だってさ。
だから探す方法は慎重に考えないと。」
「マジですか？うわぁ…祥さんが執り成してくれたんですね？助かりました。」
「ふふっ。まぁ害は無いといっただけですけどね。」
「あはは！確かに俺はめちゃ無害ですけどね。」

俺と祥さんが話しをしている時、いきなり部屋の襖が開き武が股間をボリボリ掻きながら入ってきた。
「おぃーす。おはようさん。」
「うっ、汚ねーなぁ。」
「おっおはようございます。」
ほら、流石の祥さんも顔引き攣ってるぜ？汚すぎだ。
「んーー！久しぶりにゆっくり眠れたぜ！すっきり爽快だぁ！」
晴々とした表情の武が少し勘に障った。

「さて、話しの続きですが…。まぁ取り合えず先に朝食にしましょうか？
腹を満たして考えた方が良い案が出るかもしれないですし。」
「あっ、頭は糖分があった方が働くっていいますからね？」
「そうそう、腹が減っては良い案が出ず！ですよ。さぁ、行きましょう。」
俺たちは祥さんの後を歩き、居間の様な所で朝食をご馳走になった。
また武は家畜の如く飯を食らい、祥さんはそれを唖然とした表情で見守っていた。
「本当に…よく食べますね。」
「ふぁい。はりゃが減ってはりゃが減って…。」
頬をハムスターの様にして喋るから、何を言ってるのか分からない。
「おい武！お前さぁ…遠慮って言葉知らねーの？」
「へっへんりょ？はぁなぁ…モゴモゴ…。」
何言っているのか分からないよ…。
「まっまぁ、若い男の子だし無理は無いですよ。たっ沢山食べなさい…。」
そう言いながらも祥さんの顔は、少し引き攣っている様にも見えたが？
「ほぉう（おう）！しゅにゃねー（すまねー）！」
一応感謝はしているのか？なら少しは態度で示せって！

俺たちは食事を済ませ、祥さんはゆっくり話しをしようと場所を移した。
そこそこ広い庭の一角、人目に付きにくい端っ子の方。
背の高い木で囲まれた場所だった。
真っ白な小さなテーブルと、それを挟む様に椅子が二脚、横には長椅子が一つ置いてあった。
クッションなんかも置いてあって…小さなリビングの様だった。
和装な家には似つかわしく無い洋風の出で立ちで…
燦々と日が当たる場所で、この長椅子に横たわり昼寝をしたら最高だと思った。
「へぇー、センスいいなぁ。」
ニコニコしながら武は長椅子を陣取った。
「あー！その椅子は俺が狙ったのにー！退けぇ！」
子供の様に椅子の奪い合いをする。

その洋風な場所は、何故かとても懐かしく感じて…安心出来る。
俺はその長椅子に横たわり、日に当たり…東京での生活を感じたかった。だから超必死に争奪！
でも、所詮俺は夜しか外に出なかったモヤシホスト。
マッチョ男に叶う筈も無く…椅子取り合戦は呆気なく敗戦。
「くっ、悔しい！」
「ばーかぁ！お前みたいなヒョロ男に負けるか！」
「むっムカつくー！」
俺は腹を立てながら、小さめの椅子に腰を降ろした。

「まぁまぁ、喧嘩しないで？でも、この場所を二人が気に入ってくれたようで嬉しいです。
この場所は、俺の秘密の隠れ家なんだよ？」
「隠れ家？ですか？」

「うん、俺が作ったんだ。木材貰ってきて組み立てて…なかなか上出来でしょ？」
「これ、祥さんが作ったんですか？すげー！」
「ふふっ、ありがとうね。私もこの時代に身一つで飛ばされて…
何か昔を感じる様な場所が欲しかったんだ。まぁ取り合えず落ち着いて座って？」
祥さんはニコニコしながら椅子に座る。
「はぁーい。」
「うぃーす。」
お兄ちゃんに窘められた弟の様に大人しく従う。

「では、彼女の捜索方法でも相談しましょうか。」
「あっはい。お願いします。」
「うん。あのね…さっきも言ったけど、張り紙とかの目立つ方法は良くないと思うんだ。
でも情報は仕入れなくてはいけない。勿論私の情報網も活用はするけどね。」
「目立たずに人を探す…かぁ。誰かに話し聞いたりしないと情報もヒントも手に入らないし…
人の噂話しとか盗み聞き出来ればいいのになぁ…。」
「…噂話し…盗み聞き、ですか？」
「あっ、はい。噂話しとか…あの、前から思ってたんですけど、
叔母ちゃんの井戸端会議とかの情報ってスゲー！って思ってたんです。
一丁目の誰さんの息子が大学落ちたとか、二丁目の誰さんの娘が妊娠したとか…
うちの母ちゃんも、何で知ってんの？的な事話ししてた事あったから…」
「女性特有の情報網ですね。そうかぁ…井戸端…噂…盗み聞き…。」
「うっ、盗み聞きは聞き流して下さい…。」

「いえ、良いアイディアだと思いますよ？」
「ぬっ盗み聞きがですか？」
「えぇ。何も犯罪を犯せとは言ってませんよ。
ただ自然に会話の内容が聞き取れる事が出来たらって。」
「あぁ、本当なら盗聴器が有れば一番ですけどね。」
「ふふっ、それは犯罪じゃないですか。まぁ冗談はさておいて、女性の情報網は確かに侮れません。
どの時代の女性も、噂や人の秘密の話しが好きなのは変わらない筈ですからね。」
「多分そうでしょうね。」
「なら何とか噂を聞きだす方法を考えなくちゃいけませんね？」
「方法…かぁ。うーん…むぅー。」

女性の話に割り込んで聞く…訳にはいかないな。追い出されるか不審者扱いが落ち。
こっそり陰に隠れて聞く？いやいや…隠れる場所が無ければ出来ない。
うーん、どうやって話しを聞く？

俺が少ない脳みそをフル回転させていると、祥さんが話し始めた。
「まぁ、彼女が自らの意思で隠れている可能性がある以上、焦る必要も無いでしょう。
ゆっくり…そして確実な方法を探しましょう？」
パンク寸前の俺の頭を冷やす様に祥さんは優しく語りかける。
「はっはい、そうですね。」
「そう、事を焦っては良い結果が産まれませんよ？」
「はい。そうします。」

俺が祥さんと話し合っている最中、一言も言葉を発さない武。
何をしているかと武の方に視線を向ければ…スヤスヤ昼寝なんてし

ていやがった。
一瞬殺意を覚えたが…よく見れば上半身裸で腰に布を巻き付けた身体は太陽の光に反射している。
眩しそうに腕でムカつく程整った顔を隠しているその姿は、まるでモデルの様だった。
不覚にも見入ってしまった俺。くっ…同じ男なのに納得いかねー！！

出会いの章（6）

「あの…祥さん何処に行くんですか？」

俺達は祥さんに連れられ、何処かに移動中。

「ふふふっ、良い所ですよ？」

祥さんは不敵に笑う。

すでに日も落ちた夕方の空の下、他の人達より一回り図体のデカイ俺達。

三人並ぶと余計にデカさが際立つ。

髷を結ってる訳でもないし…他から見れば、変人の集団だ。

まぁ頭を剃る勇気は無いから、この事は考えない様にしよう。

さてさて祥さんは何処に行くのか…もう３０分も歩いてるし、そろそろ教えて欲しいです。

「祥さーん、疲れました。そろそろ目的地だけでも教えてもらえませんか？」

「知りたい…ですか？」

「はい。理由も分からず歩くのは疲れますよ。」

「そうですか…。到着した時の驚いた顔が見たかったんですがね、残念。」

「おい！いい加減教えろよ！！」

武が乱暴に口を挟んでくる。

しかし…もうちょっと丁寧に喋れないのかねこの男は。

この人はお前の命の恩人よ？分かってる？
「あっ、でも見えてきましたよ？ほら…あそこ。」
「えっ？」
「んん？」
俺たちは祥さんの指差す方向を見る。
大きな門に、眩い光…
男たちは小走りで門に吸いこまれていく…
これってもしかして…
「うおおお！！これって売春街じゃねーか！！」
…もうちっと言い方ないの？武くん。
「ふふふっ。その通りです。まぁ本物の吉原では無いですがね？
ここの名前は「吉原」（きちはら）。」
「きっきちはら…読み方が違うのか？」
「えぇ。でも行われている事は同じ。はっきり言って売春街。春を売っている街です。」
「いやっほーー！！久々に女抱けるのかぁー！」
「いえ、あのね…、あぁ！武君待って！！」
祥さんの話を聞かずに武は走って行った。
「あいつ…祥さんすみません。」
「いえいえ、男として気持ちは分かりますから。」
「でも…何で吉原に？もしかして慰労会か何かですか？」
「いえ？慰労会ではありません。貴方達無職でしょう？」
「ぐっ。まぁ…この世界では…」
やっやけに引っ掛かる祥さんの言葉。
「あのね、木を隠すなら森の中って言うでしょ？なら女を隠すなら

？」
祥さんのナゾナゾ。
「えっと…女を隠すなら…あっ！！女の中！」
「ふふっ、正解。これだけ女が溢れる場所なら隠しやすいと思いませんか？」
「なるほど！！さすが祥さん！！」
「ふふっ。では行こうか光くん。」
「はい！お供します！！」
俺は武の後を追う様に大門に吸い込まれていった。

大門の中は華やかだった。
白粉の匂いが充満し、軒先には煌びやかな女性達。
光り輝くその場所は、俺に歌舞伎町を思い出させる。

「うわぁ…これが吉原。って偽物ですけど…。」
「まぁ実際もこんなもんだと思いますけど…さてとりあえず武くんを探しましょう。」
「たっ武ですか？あんな奴放っておけばいいのに…。」
「まぁまぁ、ここは外とは違う理屈で色恋が行われる場所です。それに何かと危ないんですよ？」
「危ないんですか？まっまさか侍とか？」
「んー、侍も居ますけど…ほら例えばアレです。」

祥さんは一軒の宿を指差す。
そこには入口で大声で叫ぶ浪人風の男。
どうやらお目当ての花魁に酷く振られたようだ。
そういえば…花魁は客を選ぶって聞いた事があるなぁ。
んで、その浪人は苛立ちを誰かれ構わずまき散らし始めた。

遠巻きに見ていた町人に毒を吐き、近くの若い侍に絡んでる始末。
うわ、殺されちゃうんじゃなの？侍に何か絡んで…

「んだよぉー、お前等みたいなお坊ちゃんの所為で振られるんだろうがぁ！！」
酔ってるなこの浪人、これじゃ振られるよ。
「貴方は酔い過ぎています。今日は早くお帰りなさい？」
「うるせぃ！俺に説教してんじゃねぇよ！この若侍がぁ！！」
…殺される。侍になんて事を！！

俺は見て居られない。
「しっ祥さん！やばくないですか？あの浪人殺されちゃいますよ？」
「ふふっ。あの浪人は運が良いのか悪いのか…。」
「へっ？」
「まぁ、黙って見ていなさい。」
祥さんは落ち着いている。まぁ祥さんが言うなら大丈夫なんだろうけど…

見た目は15～6歳位の嫌気がする程の美男子な若い侍。
若い侍は身分が高いのか、両脇に部下みたいな侍を引き連れている。
部下は侍の前に立ち、真剣を抜く…
「なっ何だよ！きききっ吉原で刀なんて抜きやがって！！」
浪人は噛みながら毒を吐く。
「五月蠅い。浪人風情が若に対して何たる暴言！許すまじ！！」
今にも斬りかかりそうな部下たち。
うわぁ！！ひっ人殺しが目の前で！！

「ししし祥さん！やばいですって！！」
「まぁ、大丈夫だからね？あっほら見て御覧？」
祥さんは笑って指を指す。

「ふふっ、刀を閉まって下さい？僕は大丈夫だから…。」
若い侍が取り巻きを抑える。
「しっしかし！」
「僕は大丈夫だから…。さぁ、掛っておいで？」
若い侍は、身体を乗り出し浪人を誘う。

「ばっ馬鹿にしやがって！！」
浪人は胸元から小さな刀を取り出した。一方侍は丸腰の様子。
あっ危ない！！！
浪人は鞘を放り投げ、侍の方へ一直線！
「うりゃぁぁぁ！！」
殺された！っと思ったけど、若い侍はそれを軽く交わす。

「うっ…うぅぅぅ…」
うめき声が聞こえたかと思うと、浪人は地面にひれ伏す。なっ何が起こった？

周りから歓声が上がり、また何事も無く男たちは徘徊を始める。
俺には何があったのか全然わからない。

「祥さん…一体どうなってるんですか？」
「分からなかった？今の手刀。」
「しゅっ手刀？全然見えなかった…。」
どうやら若い侍は、避けると同時に浪人の首に手刀を一発お見舞いしたらしい。
すっすげぇぇーー！
俺は若い侍に釘付けだ！

すると、その若い侍は何かに気付いた様に、俺たちの傍にやって来たんだ。
やば！ガン付けた訳じゃないよぉー！助けて！

「おや？先生じゃないですか。お珍しい…。」
若い侍は祥さんに声を掛ける。よっ良かった…。
「おやおや若じゃありませんか。今日も遊びに？」
「うん。盛りなんでね？それはそうと…若は止めてくださいよ！」
「ふふっ。若なんだからしょうがないじゃありませんか。」
「もう先生ってば…。はて、その隣の派手な方は？お知り合いですか？」
若い侍…若は俺の方を見ている。何故か緊張。

「あぁ、古い友人です。光という者です。さぁ光ご挨拶申し上げて？」
「ふーん、先生のご友人ですか。初めまして。」
若い侍は俺の方に手を差し出す。

「あっはい！俺は光と言います、。宜しくお願いもうもう…もうしあげまする…。」
噛み噛みな程俺が緊張する理由。
どうみたって俺より年下だし、風貌も優男って感じなんだけど…
こいつは絶対腹黒い！！俺の野生の感が危険だと信号を発している。
しかも身分も高そうな侍！逆らわない方がいい。
俺はオドオドしながら侍の手を握り返した。

「よろしくね？俺は徳…えっと、徳さんだよ。宜しくね！」
「とっ徳さんですか？宜しくお願いします。」

若い侍…徳さんはにこやかに笑い、また花街へと繰り出して行った。
あの侍…一体何者だ？

「祥さん、あの人は一体…。」
「ふふっ。まぁ誰でも良いじゃないですか！さぁ武君を探しましょうか？」
祥さんははぐらかしたけど…さっき徳何とかって言って無かったか？

俺たちは再び武を探し始めた。
あの風貌だから直ぐに発見できるかと思ったけど…居ないぞ？

立ち並ぶ店を一軒一軒覗いていく。
しかし武の姿は何処にもない…あいつ、何処行きやがった！！

暫く歩いていると、一軒の食事処から大きな笑い声が響いてきた。
聞き覚えのある笑い声…武の声だ！！
俺と祥さんは声のする店の中に入って行く。

出会いの章（7）（前書き）

この作品には本当の歴史は出てきません。
ここは江戸村…架空の江戸なんです。

出会いの章（7）

武の声が店の中から聞こえてくる。
何やら楽しそうだ。
武の周りには数人の男が座っている。
目付きも悪く、服装も乱れている。
でも…皆若干怪我してませんか？

「…武？居るか？」
俺は声を掛けながら店の中に入って行く。
「おう！光と祥さん！遅いぞ！」
ご機嫌な武はすでに酔っぱらっているようだ。
こっちが心配して探せばこれかよ。

「お前、何やってんの？」
「何って、酒飲んでんだよ！見れば分かんだろ！」
「お前なぁ…。こっちは心配して探してたんだぞ？」
「あぁ？そうか？そりゃスマン。」
「ホントに…もうちょっと考えろよ？とにかく店でるぞ。」
俺は武の二の腕を掴む。

「…おい兄ちゃん。旦那を何処に連れてくんだぁ？」
隣に座っている男が俺を睨む。
「どっ何処って…。少々用事が…。」
「旦那ぁ、こいつは知り合いですか？
睨みを利かせた男は武に話しかける。

「あぁ、こいつは俺の恩人かもしれない奴。丁重に扱えよ？」
「恩人…。すっすいやせん！！旦那の恩人さんに失礼な口を！」

男は慌てて俺に頭を下げる。
あの…一体何があったんですか？

武は吉原に入るなりこの男たちに絡まれたらしい。
金髪の頭にデカイ態度。背も高くて髷も結って無い無法人。
そりゃ絡まれる。
んで、絡まれた武は当然反撃に出て…圧勝したらしい。

この俺に話しかけてきた目付きの悪い男の名は新八といらしい。
武に目を付け喧嘩を売ったのはいいが、武は思いのほか強いらしく負けてしまった。
武の強さに惚れたとかで、今武に酒を奢りながらスカウトしていたらしい。

「旦那ぁ、お願ぇですから私らの所に来やせんか？」
「…やだよ。面倒臭ぇ。」
「そんな事言わねぇーで下さいよ。お手当は弾みやすからぁ。」
「…やだよ。」
武にその気は無いらしい。

「…お手当…ですか？」
誘いに食いついたのは祥さんの方だった。
「へぇ？…へぇへぇ！たんまり弾ませていただきやす。」
「…武君。行きなさい。」
「ちょっ！祥さーん。」
「毎日ブラブラしているよりマシです。」
「さすが恩人さん！分かってらっしゃる！ねぇ旦那、考えて下せーよ！」
「…面倒だなぁ。」
タダ酒を煽る武は本当に面倒そうだ。

祥さんの言葉に、武は嫌々引き受ける事にした。
でも祥さんは何で武にヤクザ業を勧めたんだろう。
それにお手当という言葉…やけに気になりますが？

とにかく俺と祥さんは武を残し、再び花街に身を滑り込ませる。
店先を覗き込み、麻美の姿を探した。
…居ない。どこにも居ない。
悔しい様な、ちょっとホッとした様な…
だって、店先に居るって事は身体売ってますの証拠。
恋人ではない麻美だけど、実際あそこに座ってたらと思うと…

「うーん、やはり店先には居ない様ですね。」
「…祥さん？居ないと思ってるのに来たんですか？」
「えっ？いやぁ…店先には居ないと思ってましたというお話です。
隠れるなら女郎では無く女中になってるでしょうし。」
「女中？それって…」
「まぁ、下働きですね！掃除したり料理出したり…」
「そっそんな！それじゃ分からないじゃないですか！」
「まぁまぁ。だから売春街では無く吉原に来たんですよ。」
「…意味が解らないんですけど。」
「まぁまぁ。あっ！ここです。この店…。」
祥さんの指差す先には一軒の宿。
随分大きい店構えで、それが老舗なのがハッキリ分かる。
この店は何ですか？

「この店は、私の友人が居るお店です。さぁ…中に入りましょうか。
」
「友人ですか？宿に？」
「あははっ！とにかく会ってみれば分かりますから！」

祥さんを先頭に、眩い光の中に入って行く…

「いらっしゃいませ！ようこそ先生！」
「居ますか？」
「いらっしゃってますよ？さぁどうぞ！」
店主らしき男が店の奥に案内する。
初めての吉原…どんな感じなんだろう。
店主とも顔なじみの様子だし、きっと常連なんだろうなぁ。
あっ！もしかして祥さんが武のお手当に拘った理由はこれかもしれない。
祥さんも男だなぁ。

「失礼します。ご友人がお見えでございます。」
店主は部屋の前で正座をして挨拶。そしてゆっくり襖を開けた。
奥から賑やかな声が聞こえる…もしかして使用中なんじゃ？

「おぉ！誰だぁ？」
中から男の声が聞こえる。
「先生がいらっしゃいました。」
頭を下げ店主が言う。
「先生？おぉ！ようこそようこそ！！」
店主は下がり、かわりに祥さんが前に立つ。
「梅さん、今日も楽しそうですね！」
「先生！そんな所に立ってないで早く入りゃー！」

「さぁ、中に入りましょうか。」
先生は俺の方を向く。
「あの…いいんですか？使用中なんじゃ？」
「ふふふっ。大丈夫ですよ？」

「おぉ？連れでも居るのか？」
中から梅さんと呼ばれた男の声が聞こえる。
「えぇ。今日は友人を連れてきました。」
祥さんを先頭に中に入って行く。

「よぉ！先生！」
「梅さんは相変わらずお好きですね！」
「あははは！生きる源ちゅーかな？おや？そん方が友人かい？」
梅さんらしき男が話しかけてくる。
「はっはい。光と言います。」
「光…そりゃ珍しい名前だなぁ。」

ご機嫌な男は才谷　梅ノ介というらしい。どっかで聞いた様な？
この街では珍しい長髪姿。眉毛が凛々しい男前だ。
一見侍の様だが、どこか人懐っこい。不思議な男だった。

「んで、今日はどんな用事だい？」
「えぇ。是非梅さんに聞いて欲しい事がありまして。」
「俺でいいのか？徳さんの方がいいんじゃないか？」
「…吉原通の梅さんがいいんです。」
「ならワシは構わんが…。で、どんな事だ？」
「最近…物珍しい女が売られてきたという話は聞いてませんか？」
「物珍しい女かぁ。いや、知らないなぁ。」
「そうですか。梅さんが知らないなら吉原じゃないんでしょうかね…。」

「あの…祥さん？」
「光君…残念ですがここには居ない様です。」
「えっ？」
「もし彼女が吉原に居るなら、梅さんが知らない筈は無いんですが

…。」
「そうなんですか？」
「この梅さんは珍しい物が何より好きなんですよ。彼女の噂を聞いたら黙ってませんよ。」
「…でも、ただ梅さんが知らないと言う事は？」
「…ありえませんね。この男の情報網は天下一品ですからね。」
「そっそんな…。」
「残念ですが他を当たった方が…。」
「そうですか…。」

「何だ？湿っぽい顔しやがって！ほら！お前も飲め！」
少し落ち込んだ俺に梅さんが酒を差し出す。
「…じゃぁ一口だけ。」
折角進めてくれてるんだから…。俺は猪口に入った酒を一気に流し込む。
「…ほぉぉ！良い飲みっぷりだ！さぁさぁ、もう一杯！」
「…頂きます。」
また一気に流し込む。

何故か俺は梅さんに気に入られ、その後暫く酒の相手をさせられた。
久々の酒は、俺に以上なまでの酔いを齎す。

「あぁーあ！出来あがっちゃったよ。」
「梅さんが飲ませるから…。」

頭の上で、祥さんと梅さんの声が聞こえる。でも遠ざかって行くぅー！
気持ち悪い…この街の酒はからりキツイ。

あー、頭がフワフワして気持ちがいい。
頬にプニプニした感触…これ何だろう。

翌朝、俺は殴られた様な頭痛で目が覚めた。
いやぁ…飲み過ぎました。

そういえば祥さんは？
…居ない。
ってか梅さんが横で寝てるし！
腹を出し、ふんどしも丸出し。股間をボリボリと掻き汚らしい！！
どうやら俺は梅さんの尻付近で寝ていたらしい。

部屋には俺たち二人だけ。
うーん…昨日はどうなったんだけ？
梅さんに酒飲まされて…気持ち悪くて横になって…
プニプニが気持ち良くて…んで頭痛い。意味分かんねーー！

それに…夢で見たプニプニした物…もしかして梅さんの×××？
うえぇぇーー！

俺は物凄い吐き気に襲われ、近くにあった水差しを口に宛がう。
そんな時、朝の光と共に襖が開いた。
祥さんかと思って視線を向けると…

そこには美しい女郎が立っていた。

出会いの章（7）（後書き）

才谷梅ノ介…モデルは勿論、分かりますよね？
でも作者は言葉を知らないので梅さんはほぼ標準語で話します。
もし本物の梅太郎さんがお好きな方は翻訳してお読みください。

出会いの章（最終）（前書き）

出会いの章は最終となります。
続いての章もありますので、お付き合い宜しくお願いします。

出会いの章（最終）

美しい女郎が部屋に入ってくる。

「おや？起きましたか？」

「…えっ？あっはい！起きましたか？」

「ふっ、真似しないで下さいな。」

口元に手を宛がい、優雅に笑う美人。

綺麗な衣装を身に纏い、髪の毛は盛り上がっている。

…これ、花魁っていう人じゃないのか？

「おや、坂…才谷さんはまだお休みですか。」

グゥーと鼾を掻き眠る梅さんの方を見る。

「汚いです事…まぁ、男の人ですからねぇ…で、貴方は光さんっと言いましたか？」

急に名前を呼ばれたからビックリしてしまう。

「はい！光と言います。」

「昨日は楽しかったですねぇ。酔ってしまわれて残念ですよ。」

昨日…？俺この人と話ししたっけ？

思いだせないぞ？こんな美人と話しした筈なのに。

「…お忘れですか？じゃぁ…ほれ！」

「…ぎゃうん！！！」

着物の裾から手を入れられ、俺は悶絶した。

そうだ、思いだした。この痛みは…

昨日、俺は梅さんに酒を飲まされて…そうだ、梅さんが気を利かせてくれて…

寝ようと思ったらそこには女の人が居て…脱がされて…
俺はパンツ一丁になって…そうしたら相手は俺の下着に釘付けになって…
相手の女の人が急に中に手を入れてきて…握られたんだ！
そうだ、この綺麗な人は昨日の相手の人だ！

「きっ昨日俺…貴方に何かしましたか？」
「昨日ですか？はい。」
「…すいませーーん！俺酔ってて…。」
すると花魁はオホホホと笑いこう言った。

「ここは男と女が騙し合う場所ですよ？簡単に信用しないでくださいな。
何もありませんでしたよ？光さんは勃ちすらしないんですからね。
でも、ここは吉原…私にとって銭もらって身体を売る場所です。
折角私が色々してさしあげたのに…こんなのは初めてですよ！
逆に契りが無いのが困る位なんです。謝るなら勃たない事を謝って下さいね？」
…はい。申し訳ありませんでした。男として情けないです。
でもさ、色々してくれたってのは…
あのプニプニは花魁の？うぉぉ！良かったぁ！！

そんな話をしていた時、寝っ屁をしながら梅さんが目を覚ました。
「…うぁぁぁ！ふぁーー！…あれ、ここは…。」
寝ぼけている梅さんに、花魁が声を掛ける。
「梅さん？今お目覚めですか？遅い事…。」
「んっ？おぉお！花魁かぁ！こりゃ朝から豪勢だねぇ！」
「何を言ってるんです？私は眠いですよ…。」
顔を横に向けて花魁が小さく欠伸をする。綺麗で上品な欠伸だ…

「おぉ！すまんなぁ…。よし！じゃぁえっと…光！出ようかなぁ！」
梅さんはボサボサの服を軽く直し、立ち上がる。
「おいでやす。」
花魁は小さく口ずさみ、立ち上がる。

梅さんはそのまま部屋を出て行き、俺もその後に続く。
…なんか夢の様な時間だったなぁ。

店を出る時は、店主と花魁が見送りに出てくる。
…すげー、時代劇で見た通りだなぁ！
「またお待ちしております。」
そういって頭を下げてくる。
大変な仕事なんだろうなぁ、花魁って。

頭の飾りも衣装も重そうだし、こんな朝早くまで起きていて…
なのに客を送って…また仕事だろ？すげーな、ホストよりハードだ。

「ねぇ、花魁さん…。」
俺は頭を下げている花魁に話しかける。
「花菊です。」
「花菊さん！すいません…あの、この仕事って大変じゃない？」
「まぁ…仕事で楽は無いでしょう。」
「…まぁそうだけど。じゃぁ、今度は俺が花菊さんを持て成してあげるよ！」
ナンパですけど？何か？
「持て成し？それはどういう意味です？」
「だから、俺がここの事を忘れさせてあげるよ！」

だって、このまま夜のリベンジを果たさないままイ〇ポ野郎と思われるのは嫌だし。

それに…花魁だって女。ホスト（元）を嫌いな筈は無い！
今度店外デートでもしようよ！一瞬でも君から吉原を消してあげる！！
俺はそういう意味で言ったんだ。

「…身請けしたいというんですか？」
店主が口を挟んでくる。
「身請け？身請け…」
どういう意味だ？…あぁ！身を請け負う、預かるって事かぁ！
そうそう！二人だけで出掛けたいんです！店外デート！

「はい！身請けしたいんです！いいでしょ？花菊さん！遊ぼうよ！」
「…貴方がそんな高い方だとは…。はい、私は良いですけど…オヤジ様は…。」
「…お前が良いと言うなら、私は何も言う事はない。」
「よかったぁ！じゃぁ花菊さん！また近いうちに来るから！電話じゃなくて…連絡するね！」
「はい。お待ちしております…旦那様。」

俺は元気に歩きだす。
久々のデートだぁ！あんな綺麗なお姉さんと一緒に！
しかも…うふっ。帯クルクル―なんてしちゃったりして！アーレ―ってね！

俺は言葉の意味も知らずに口走り、意味も知らずに花菊を見受けする羽目になってしまった。

「おい、光君…お前はそんなに金持ってるのかい？」
「えっ？何ですか梅さん。」

「いやぁ、女郎を身請けするなんて…普通の金持ちじゃ出来ないだろう。」
「デート・・・いや、逢引するのにお金が掛るんですか？」
そうか、俺も同伴とか＋（ぷらす）貰ってたし…それに食事も高級な所に…
しまった。俺…金無いや。まっ祥さんに貸して貰おう！
でも…デート以外にも、麻美を探すのに多少の金は必要だな。
俺も何かバイトしないとなぁ…。

俺は大門を出て、祥さんの待つ家に戻った。
あー、腹減った。
「…おはようございます。祥さん…。」
朝帰りしちゃって御免なさい。
「おや、光くん午前様とは…やりますね。」
「そんな…。祥さんだから言いますけど俺…勃たなかったみたいで…。」
「それは…、花魁に怒られませんでしたか？」
「はい。ギュッと絞められました。」
「ぷっ。…ごめん。」
「あの…それで祥さんにお願いがあって…」

俺は祥さんに朝の事を話し、少しでいいからお金を貸してくれないかと頼み込んだ。
「祥さん、少しでいいんですけど…。俺、後でバイトでも何でもしますから！」
男光、一生のお願いです！！！
祥さんは驚いた顔で俺を見ている。言葉も無いと言った表情だ。
…だよね？無職の男が金借りてまで店外なんて…呆れますよね？

「…光君、君は身請けという言葉の意味を分かっていますか？」
「身請けですか？はい！店外デートって事ですよね？」

えっ？違うんですか？
祥さんは思い切り溜息を付いている。俺…やっちゃった系？
「あのね、吉原で言う身請けとは…お金を出して女郎を買うという意味ですよ？」
「…まぁ、言葉は悪いかもしれないですけど…はい。一発見返してやろうと…。」
「一発…、あのね一生ですよ？身請けというのは…。」
「一生…ですか？えっえぇ？」
意味わかんねぇ。

「身請けとは、女郎を大金で店から買うって事なんです。貸してくれと言われても…
　そんな大金、ある訳ないでしょう？」
きっ気の所為か、祥さんの声が恐ろしい…
「あの…幾ら位ですか…ね？」
「知りませんよ。でも見た事も無い様な大金が必要なのは間違いないですね。」
「…マジッすか。おっ俺…謝ってきます！！」

再び草履を履き、俺は吉原に走った。
祥さんは…俺を見てまた溜息を付いて居た。
「…本当にトラブルメーカーですね。」

一方吉原、俺は大門の前で立ち尽くしていた。
謝って許してくれるかな？怒られたらどうしよう…。
しかし…うん！大金なんて無いと正直に言おう！

こんな無職で一文無しの俺、殴っても殺しても価値なんて無いだろうし！
そう…きっと怒られるだけだ。大丈夫…怖くない！と思う。

「あの…すみません。」
俺は暖簾を潜り、中に声を掛ける。
「はい、まだ準備…あら、旦那！ちょっと待って下さいね？」
女将らしき女が走って行く。
すると…店主が慌ただしく出てきて土下座とも思われる挨拶をする。

「だっ旦那様！もう花菊を？」
「いっいえ…、そういう意味ではなくて…。」
「まさか、花菊を身請けするのに他の女郎を？」
…浮気するのかって聞いてんのか？そんな余裕は無い！！

「ちっ違いますよ。んじゃぁ…花菊さんと話がしたいのですが…。」
「花菊ですか？しかし…まだ花菊は…。」
店主は二階に視線を送る。寝てるってことか？
「…では、また後で来ますね？」

俺が店から出ようとした時、綺麗な声が店に響き渡る。
「待って下さい！旦那！」
視線を向けると、花菊が髪を垂らした状態で現れた。
綺麗だ…、何も飾りが無い方が美しい…って、今それ所じゃない！！
「あの、花菊さんと話がしたくて来ました！」
「…では、少しお待ち下さい。」
少し膝を曲げて挨拶する花菊さん。どうやら俺と会ってくれる様だ。

…約一時間後、俺の待つ部屋に花菊は来た。
昨日とは違い、少し楽そうな着物。でも頭は重そうだ。

「お待たせしました。旦那。」
「いっいえ…。忙しいのにすみません。」
「んで、ご用は？まさか…今すぐにでも身請けしたいと？」
「あの…、その話しで来たんです。」

俺は…謝ろうと思い、その形を土下座という形で表してみた。
「花菊さん！すみません！俺…無職の一文無しなんです！身請けに大金が必要なの知らなくて！」
ゆっ許してくれるまで俺、頭あげませんから！許して！
「…旦那、今なんと？金子（きんす）が無いと？」
「はい！一文無しです！だから身請け以前にデートする資格も無いんです！」
「まことですか？その話しは…。」
「はい！本当です！ご迷惑かけて申し訳ありませんでした！この話は無かった事に！！！」
話を忘れてくれ！そう言うしかない。

「…馬鹿にしてるんですか？旦那…。」
「えっ？そんな…ただ知らなかったんです。」
「知らないで済む話だと思いますか？これは…そんな簡単な話では無いんですよ？」
「えっ？そうなんですか？」

気丈に振舞っていた花菊、流石に怒りの片鱗を見せ始める。
「…女郎が身請けを断られた。落ち度が無いのに断られた…そんな事…。」
ワナワナと握った拳が震えている。
「すみません。御免なさい。」
只管謝るしか無い！俺は…再び土下座！

「…女郎にそんな生き恥さらして生きて行けと？」
「いっ生き恥って、さっきの話じゃないですか。店の人位しか知らないでしょう？」
「…女郎から見栄を取ったら何が残るんです？それに…この話は吉原中の噂になってますよ。」
「まさか…本当ですか？また冗談でしょ？やだなぁ…」
「冗談？冗談なら…どれだけ良いか…。」
花菊の身体が震えている…やべ、泣かせちゃった？
俺は花菊に近づく、せめて肩でも貸そうかと…
真っ赤な顔をして俯く花菊の肩に、そっと手を載せる。
花菊は顔をあげ、涙に濡れた瞳で俺を…見ていない！
いや、見てるけど…これって泣いてる女の顔？いやむしろ…

「この…大馬鹿がぁぁぁぁ！！！」

花菊の大声が響いたかと思った瞬間、俺の顎は何故か痛みが走って…
あれ？まだ酔ってるのか、床と天井がグルグル回って…あれ？
ドス———ン！俺はひっくり返った。

「あれま、少しやり過ぎたかしら…。」
花菊が俺を見下し何か呟いている。
でも俺は再び夢の中に片足を突っ込んでいて理解できない。
…何言ってんの？花菊……

「旦那ってば白目剥いちゃって…。まぁ仕方ないでしょ？私に恥を掻かせて…
まっ、このまま黙って引き下がる訳にも…ねぇ？」
不敵に笑う花菊の声は、既に俺の耳に届く事は無かった。

立ち上げの章（1）（前書き）

今章から立ち上げの章となります。
花菊の身請け金の為に翻弄する光の運命は…

立ち上げの章（1）

花菊の声は俺には届かない。だって…
俺ってば失神してる最中だからぁ！！

俺の顎に見事な一発をお見舞いした花菊は自分の仕出かした事も臆せず俺を叩き起こす。
「旦那！何時まで寝てるんです！！」
「…あれ、俺は一体…。」
「本当に弱いお人です事。女子の拳で意識を無くすなんて。」
呆れたように俺を見下す花菊。
あのさ、顎に入ったら女の力でも十分気絶しますから！
「っで旦那、これからどうするんです？」
シャァシャァと話す花菊。
「…とりあえずごめんなさい。俺…身請けの意味知らなかったんです。」
再び土下座！ってかこれしか出来ない！
キャンセル料すら払えなくて御免なさい。

「…それはもう聞きました。旦那は身請けの意味を知らなかったのでしょう？」
「はい！すみません。」
「だから、知らないで済む話じゃないんですよ。」
お前はまた殴られたいのか！という花菊の表情。
「…じゃぁ、俺はどうすればいいんですか？」
「…金子を用意するしか無いですね。」
「金ですか。」
「金ですよ金。」

結局金かよ！と思ったが花菊の言う事も分かる。
花魁が男に振られたなんて街中に知れ渡ったら…花魁の格が下がってしまうだろう。
そんな事になる位なら花魁を止めて安い売春婦にでもなった方がマシなんだろう。
こんな綺麗な（気は強い）を、そんな目にあわす事はできない。

「俺は…どうしたらいいんでしょうか。」
ここは腹を割って相談した方が良さそうだ。
花菊の気が済む様に、花菊のプライドを傷つけない様に…
「旦那、仕事が無いと言いましたが、それはずっとですか？」
おっ、相談に乗ってくれるのか？
「…まぁ、一応数日前までホストはしてました。」
「…ほす…とう？それはどんな仕事ですか？儲かるのですか？」
「女性の酒の相手をする仕事です。あっ、花菊さんの仕事と少し似てますね！
それで年収…給金は売れっ子…仕事が上手な人程沢山稼げます。」
「…貴方は仕事が上手だったのですか？」
「うーん、泣かず飛ばずですね。」
「そんなぁ…、では他に稼げそうな仕事の経験はないんですか？」
「うーん、上京…えっと、故郷に居る頃は親の脛を齧ってまして…」
自分で言うのも何だけど、俺って自慢できる事何も無いよなぁ。

「ふぅ…。ではしょうがない。そのホストウという店を開きましょう。
開店資金は私が出しますから。」
…はぁ？
「あの花菊さん？俺に江戸でホストをやれと言うのですか？」
「左様で。他には何もできないのでしょう？ならそのホストウとやらで身請け金を工面しなさい。」

花菊は何が何でも身請けされたい様だ。
「…あの、俺的には構わないんですが…難しいですよ？」
「女郎屋が流行るんです。ホストウは同じ様な店なのでしょう？なら儲かる筈。」
確かに？ホストは当たれば儲かりますけど…俺ってば駄目ホストだったんだよね。
それに…店開いてる場合じゃ無いし！麻美探しだって進めないと！

「あの、実は俺…ある女性を探してるんです。」
「女性？…っ、思い人ですか？」
思い人…思う人間…あぁ！恋人かぁ！
「いえ、別に恋人って訳じゃないんですが…大切なお客さんだったんです。」
「お客？ホストウの？」
「はい。彼女は唯一俺の指名客で…。」
「指名？指名が入る程のホストウだったんですか？なら早く店を出しなさい。」
一件の指名客なんですけどね。

「…あの、ちょっと祥さ…先生に相談してもいいですか？」
「先生に？そりゃ勿論。先生なら良い知恵を授けてくれるでしょう。とにかくホストウとやらで私の身請け金を稼ぎなさい！早急に！！！」
花菊さんって本当に美人なんだけど…怖いよ。
こんな人を嫁に貰ったら…一生尻に敷かれる！！
俺は花菊さんと別れ、思い足取りで祥さんの所に帰った。
家に入るなり祥さんは俺の元にすっ飛んできて…
「どうでした？金払えとか言われました？」

そんな興奮しないでよ！という位ハァァァしている祥さん。そんなに俺の事…

「祥さん…、すみません心配掛けちゃって。でも大丈夫ですから。
　あっ、顎に一発食らいましたがもう痛くないので…。」

恥ずかしくて女にヤラレタなんて言えないけど…ぐすん。俺痛かったの！

「…そんな事はどうでもいいんです！金は払えと言われなかったのですね！！」

…、そっちかい！！！

「あの、何か変な事になっちゃって…聞いて下さいよ！！！」

俺はさっきの事を祥さんに話して聞かせた。

金が無いと言ったらホストをやれと言われた事。

出資はしてやるから早く店を出す様に迫られた事。

んで結局は花菊を身請けする羽目になりそうな事。

祥さんは俺が話している最中、黙って聞いてくれた。

ウンウンと頷き、何か言いたそうにしても我慢している様だった。

そして全てを聞いた祥さんは、重い口を開く。

「話はわかった。じゃぁ…やってみたら？」

なっ！抜け道を教えてくれるかと思いきや、やれと？江戸でホストを？

「祥さん！そんな無茶言わないでくださいよ！他に道が無いか一緒に考えて下さいよぉ！」

「確か…江戸村にはホストクラブは存在しない筈です。
　商売敵もいないですし案外儲かったりして！」

祥さんの顔が輝き始める。まずい…祥さんはノリノリだ！

「でも！ホストなんて受け入れられるんでしょうか？ここは江戸時

代のコピーなんですよね？
　歴史とか知らないですけど、この時代って女性が酒とか飲むイメージ無いんですけど…。」
奥ゆかしい日本女性は見ず知らずの男と酒を酌み交わす筈が無い！！
客が居なければ出店しても意味がない。むしろ出張ホスト…夜のお相手でもした方が儲かりそうだけど。
「あのね、江戸時代の女性は確かに奥ゆかしく上品です。でもね…例外だってあると思いますよ？」
「例外…ですか？」
「そう売春婦達ですよ。彼女達は客と酒を飲み身体を売って生活をしている。
　普段はムカつく客にも愛想よくしなくちゃいけませんし、案外ストレス溜まってたりして…
　そこにホストクラブがあったら…来ると思いませんか？」
なにやら歌舞伎町でもある様な話だな。

「でも、水商売…女郎の人だけだと身請け金堪る程稼げるとは…。」
女郎相手だけだと儲からない。ガツンと儲けるには…そう富裕層！
大店の奥様とかお嬢様、はたまた武家のお嬢様とか…とにかく金を持っている奴ら！
そういう人が来ないと店自体潰れてしまうんじゃ…
「確かに。では…こうしたらどうでしょう。店の場所を工夫するのです。」
「店の…場所ですか？」
「えぇ。でも吉原からは女郎は出られない決まりですし…何か良い方法があれば良いんですが。」
祥さんでも難しい土地選び…やっぱり江戸村でホストは不可能なんじゃないか？
翌日、俺は昨日の祥さんとの話し合いの結果を花菊さんに報告しに

行った。
「旦那、腹は決まりましたか？」
「うーん、やるのは構わなんですけど…出店場所とか色々難しくて…。」
「では一応は働く気に？」
「まぁ働くのは働きますけど…儲かるか解りませんよ？」
「はぃ？出資するからには儲からないと私が困ります。一体何が難しいのです？」
「えっと…じゃぁ説明しますね？」

俺は花菊さんに昨日の事を話して聞かせた。
儲かるには富裕層をターゲットにしたい事。
でも女性が酒を飲むとは思えない。
大門から出られない女郎をどうやって集客するか。

「…何やら難しくて分かりませんよ。」
「でしょうね、俺にもピンと来ませんから。」
「…富裕層ですか。…そうだ！何か色を出せば？」
「色…ですか？」
「はい。ホストウに来れば良い事がある。の様な感じの何か…。」
「そっか、この街では顔やトークだけだと通らないだろうし…色…色…。」
確かに花菊さんの言う事は一理ある。
普通に店を出しても面白くないし、女性を引き付ける何かがあれば…うん、いける！
いやらしくない、何か付加価値をつければ…
例えば開運ホストとか？…これは違うか。
いや？携帯やら麻美のバックやら…歌舞伎町から持って来たアイテムを駆使すれば…
流石花菊さん！だてに花魁じゃないや！

「…後は場所です。女性が気軽に来れて、出来れば女郎さん達も…。」
「そうですねぇ、場所…あぁ！あそこが良い！」
花菊さんは思い付いた様に掌を拳で叩いた。
何処？思い付いたぁ！って言いきれる場所なんでしょ？
俺…期待しちゃうから！！！

立ち上げの章（2）

花菊さんの思いつきに期待しちゃう俺。

「花菊さん？場所の宛てがあるなら教えて下さい！」

「知りたい？」

「え？そりゃ勿論！」

「…でもね、問題もあるのよね。」

「問題？どんな？」

「まず第一に、女郎は大門から出れない。第二に、誰が土地を所有してるか解らない。」

「…じゃぁ、駄目じゃないですか！！」

期待した俺が悪いのか？

期待させる様な事言っちゃって！もう…超残念。

「…じゃぁ、どういう場所だったら花菊さん達は店に来られますか？」

「うーん、吉原の中なら。」

「それって、街に住んでる女性は来られますかね？」

「そうねぇ、絶対無理。」

「絶対無理って花菊さん…。もう、何処に店出せば良いんだろう。」

えっと、一般女性は吉原の門を潜れないらしい。

なら店は吉原の中に構える訳にはいかないし、外に構えると今度は女郎が来れ無い。

はぁ、どうしたらいいんだろう。

「…あっ！！！親分に相談してみたら？」

花菊さんは、また思い付いた様に掌をポンと叩いた。

「親分？」
「えぇ。吉原を仕切ってる親分。名前は新八親分よ。」
「新八親分…新八…、新八？どっかで聞いた様な…」
「吉原では有名な親分さんで頼りになるのよ？」
「…あぁ！思い出した！武が連れて行かれた所！！」
「…お知り合いなの？」
「うん！武…、えっと友人がお客として呼ばれた先が多分新八という人の所で。」
「まぁ！では腕の立つ人なのね！」
「まぁ…立つと言うかマッチョというか…。」
「マッチ？…よくわかんないケド知り合いなら話は早い！今すぐに行ってらっしゃい！」
「いっ今？」
「そうよ。早く稼ぎを出して貰わないと…私は何時までも此処には居られないですよ。」
「そうなの？」
「…身請けが決まってる女郎がずっと店に居たら…怪しまれますよ。」
「…そうなんですか。あの…具体的にはどの位？」
「…長くて半年かしら…。」
「…はっ半年！？」

俺は尻を叩かれる様に店を後にした。
花菊さん曰く、最低でも半年以内には身請け金を払わないと自分の立場が危ういらしい。
普通、身請けする位入れ込んだ女郎を、長々放置する男なんて居ないみたいで…。
それなのに何時までも引き取りに来ないと、女郎が振られたという解釈に繋がるらしい。
そうすれば女郎にはケチが付き、格も下がり花魁所じゃ無いって言

われた。
でもさ…普通に店開いても儲かるか解んないのに半年で身請け金程の金…用意できるかな？
プレッシャー半端ねぇ！
とにかく行動しなければ始まらない。
武…、武の所に行かなくちゃ！！でもさ、何処に居るんですかね武君。

「あの、新八親分のお家知りませんか？」
道行く人に聞きまわる。有名な親分なら家位知ってるでしょ？
「親分か？ならその角を曲がって二件目だ。」
やはり有名な人なのだろうか、答えは直ぐに返ってきた。

俺は教えられた通りに行ってみると、とにかく派手な家が一軒建っていた。
木造平屋だけど、その辺に建てる家とは違う。
電飾が付いてる訳でもないし、ペンキが塗ってある訳でもない。
木で作ってある置物やら石灯篭やら…とにかく装飾が物凄いのだ。
昼間から松明を燃やし、屈強な男たちが門番の様に仁王立ちしている。
一言で言えば…下品！！！見た目に統一感がまるで無い！
これ…すげー入り辛い！

「あの…親分に会いたいんですけど。」
恐る恐る門番に声を掛ける。
「…あぁぁん？」
ひぃぃ！怖いです！
「あっあの！俺は光と言います。親分にお会いしたいのですが。」
丁寧にね！ほっほらアポも無しに来ちゃったし。べべべ別に怖い訳じゃ！

「…お前、誰だ？」
「ですから光といいます。」
「光ぅ？聞いた事ねぇな。」
「…そっそうですか？昨日も親分と会っていたんですけど。」
会ったと言うか、たまたま武と喧嘩してたと言うか…。
「親分のお知り合いでしたか！失礼しやした！」
俺が新八の知り合いだと言うと、門番の態度が急に丁寧になった。
うっ嘘は言って無いもんね！

「今親分を呼んで参りやす。」
門番の一人が中に入って行く。
・・・・・。おっ！来た！

新八は直ぐに外に出てきた。
「旦那！昨日はどうも！」
ニコヤカに笑う新八。
「どっどうも！」
「あれ？今日はどうしやしたか？」
「あの、相談があって…。」
「相談ですか？…まぁとにかく中へ。」
「はい。失礼します。」
俺は新八に連れられ中に入って行った。

中もド派手だった。
廊下にも置物が所狭しと並べられ、なんだか落ち着かない家だ。
でも意外に広くて部屋が何部屋もありそうだ。
襖が開いている部屋からは…刺青男達の背中チラチラ見える。
こえーー！ヤクザの集まりだぁ！！！
「ここがあっしの部屋です。どうぞ中へ。」

新八が襖を開けると…中には武の姿があった。
「お！光じゃん。何…お前も祥さんに追い出された？」
「いや…違うけど。ちょっと親分に相談があってな。」
「ふーん、やくざに相談ねぇ。」

俺は親分…＋武に今までの経緯を話し、女郎が外に出るにはどうしたらいいか聞いてみた。
「…女郎を大門の外に出したい？そりゃ無理だ。」
「やっぱり無理ですか。」

女郎が大門を出れない理由の一つに、逃走防止の意味があるらしい。全員が好んで女郎になった訳じゃない。売られてきた女性だって沢山居る。
なのに俺の店に行くから外に出せ！と言われても、親元に逃げる可能性がある為無理。
でも、それじゃ俺は一体どうすればいいんだよ。

「新八さん、俺…どうしたらいいですかね？」
「うーん、旦那は一体どうしたいんですか？」
「俺は…、女郎も一般女性も来れる店を開きたいんです。どうにかなりませんかね？」
「どうにかって…、うーん…。」
考え込む新八さん。やっぱり両方の女性を呼びたいなんて無理なんだろうか。

「…なら吉原の隣に店作ればいいじゃねぇか。」
…武の一言。
「…おぅ！そりゃ名案だ！通路でも作って繋いじまえば良いんだ！そうだ！それがいい！」
新八さんは乗り気だけど…あんまり意味がわかんない。

「あの二人とも…、俺にも分かる様に説明せてくれませんかね？」
隣だとか通路だとか…よく分かんない。
俺が首を傾げていると、新八さんは丁寧に俺に説明してくれた。

「ですからね？まず吉原の隣に旦那の店を作るんです。そして入口を二つ作る。
　んでもって一つの入口は吉原の外、残りは通路を作って出口を吉原の中にするんですよ。」
…なるほど。それなら両方の女性が出入りできる！！
「すげぇ！武よく思い付いたな！偉い！！」
「…当たり前だ。」
どや！！！みたいな顔は癪に障るが、お手柄なのは認めてやる。
…とは言ったもの、吉原の隣の土地を買えるか…この街の地価ってどうなんだろう。
若しくわ持ち主から借りられれば…。

「あの新八さん、吉原の隣の土地は誰が所有してるんですかね？」
「…それは旦那、お上ですよ。」
「…お上？上さま？」
お上の意味が分からないので、俺流のボケをかましてみる。
うえさま…領収書の宛名。
…って！この街の人に通じる冗談じゃ無いじゃん！恥ずかし！墓穴！！

「…旦那。」
「うっ、はーい。」
「そうなんですよ。うえさま。」
「…えぇ！？」
「ですから、上様。お殿さまですよ！」

「…殿さま。……。！！！殿さまぁぁぁ？」

ちょっと待て？殿さまって言えば…普通一番偉い人の事を言うよな？殿さま…そんな人と交渉するなんて絶対無理だろ！！！

折角名案が飛び出してきたと思ったのに…。

立ち上げの章（3）

新八さんから出た、あり得ない言葉。
「お上ですよ。」
俺に殿さまと交渉しろって事？

「あの…新八さん？その土地は殿さまと交渉しないと無理ですかね？」
何とか現実的な解決策を！！！
藁にも縋るってこういう事なのかもしれない。
「…まぁ、殿様といっても直接話しなんて無理ですし、
役人に顔が利く人に相談するのが一番かもしれやせん。」

役人に顔が効く人…、あぁ！！祥さん！！！
俺には祥さんと言う強い見方が居るじゃないか！！
たしか…役人も相談に来るとか言ってたよな？
なら口利いて貰えないか？そうだよ！祥さんに相談してみよう！！

「居ました！役人に顔が利く人！早速相談してみますね！」
善は急げと立ち上がる俺。
「旦那ぁ！ちょっと待って下さいよ！」
新八さんが俺を止める。
「はい？」
「旦那、お話しを伺うに…問題は幾つもありますぜ？」
「…問題ですか？」
「へぇ。まず土地が手に入っても、通路を造るのにも店を立てるにも…相当腕のいい大工が必要ですし、
ホストウをやるには器量の良い男衆も必要。」
「あぁ…。確かにそうですね。大工さんも探さないといけないしキ

ャストも…。」

そうなんだよな。この江戸村に女性にヘェコラしてくれる男が居るだろうか。
俺が想像する江戸時代って、女は一歩下がって着いてくるって感じだし。
男が女性の後を着いて…なんて無理かもしれに。
でもキャストが居ないと店は回らないし…どうしよう。
人材確保…これ、一番の問題かもしれない。

新八さんに問題を指摘され、頭の痛い俺。
重い足取りで一旦家に帰る事にした。
帰宅途中、どうやって人材確保しようか悩んだけど…結局いい案は出なかった。

「祥さん、只今戻りました。」
暗〜い表情で祥さんに声を掛ける。
「おや光君、随分落ち込んでますが…どうかしましたか？」
「はい、幾つも問題があって…。あっ祥さん、お願いがあるんですけど。」
とにかく土地を何とかしようと、俺はさっきの話を祥さんにしてみる。

「…土地ですか。うーん…あっ！！そういえば…。」
祥さんは思い当たる人はいる様だ。
「祥さん！誰か良い人居ましたか？紹介してもられませんか？」
「居るには居るんですが…、ただ私にも会えるかどうか。」
「…会うのが難しい人何ですか？」
「えぇ。確か君も会ってますよ？ほら吉原で…。」

「吉原？…っ！！まさか梅さん？」

吉原で会った人といえば、最初に思い浮かぶのは梅さんの顔！
でも…、梅さんって遊び人っぽいし、真面目な相談が出来そうなタイプには見えない。
「…梅さんではありませんよ？ほら…、武君を探して居る時に会ったでしょう？」
「探してる時？……。まさか…徳さん？！」
「当たり！その徳さんなら何とかしてくれるでしょうが…。」
そう言えば会った！若くて強い侍に。
若いなら頭も柔かいだろうし、話を聞いてくれるかも！

「でもね、徳さんは侍の中でも身分が高い人なんで…私も滅多に会えないんですよ。」
「祥さんでも会えないんですか？それは…困りました。」
祥さんが会えない人に、俺が簡単に会えるとは思えない。
これは…一歩進んで二歩下がった心境だ。

「…何とか徳さんに会える方法は無いですかね？」
祥さーん、お願いですから何とかして！
「うーん、直接会いたいと願い出ても、まず会えないでしょうし…私の所に来るのを待つか、
徳さんの好きな吉原で待ち伏せするか…まぁ、どちらかでしょうね。」
なんと気の長そうな提案。
「あの、もし徳さんが祥さんの所に来るとしたらどれ位で会えますかね？」
「まぁ…半年以上は見ていた方が。」
「はっ半年ですか？」
「前回来たのも半年前ですし…、つい先日来ていたんですがねぇ。」

「まっマジッすか？」

半年なんて悠長な事言ってらんない！
今度こそ…花菊さんに首をへし折られそうだよ。
じゃぁ…吉原で待ち伏せしていた方が良いかもしれないな。
「…じゃあ俺、毎日吉原で待ち伏してみますね？」
「多分、それが一番早いかも知れませんよ。」
「はい。じゃぁ早速…と言いたいんですけど、あの…。」
「何か？」
「はい、俺が急に声を掛けて徳さんは話を聞いてくれるでしょうか。」
そうなんだよなぁ、徳さんみたいな侍…一般人の俺が話しかけても聞いてくれるかどうか。
顔見知りならまだしも、挨拶しかした事無い俺の事なんか覚えているだろうか。
いきなり取り巻きに切りつけられたりしないだろうか。
うーん…俺、超不安なんですけど！！

「まぁ、そうですよね。多分徳さんは覚えてる筈ですが…。」
ほら、祥さんも同じ事考えてるじゃん！これ…ピンチじゃねぇ？
「あの…、祥さんも一緒に来て頂く訳には…。」
祥さんが一緒なら話は早いけど…
「それは…無理ですね。」
がくっ。
「やっぱり無理ですよね。」
「はい、無理です。私が家を長時間離れれば…私だけでなく貴方も稼ぎが出るまで断食ですよ？
　それでも良いなら構いませんが…どうします？」
くっ、一文無しの俺には効果絶大だ。

俺は仕方なく一人で吉原に戻る事にした。
とにかく徳さんが来るのを待って、駄目元でも話をするしか…
せめて、急に切られる事だけはありません様に。

俺は徳さんを探して、吉原の町をうろつく毎日。
でも…徳さんの姿を発見する事も無く一週間が過ぎてしまった。
流石に吉原の住人達は、俺の事を不信がって…
そりゃそうだよな。江戸村に似つかわしくない格好でウロつく男。
女を買う訳でもなく、ただ誰かを探す様に街中を眺めているなんて
不気味だよな。
通りゆく人達がジロジロ見てくるので、流石に居辛くなってきたよ。
なんか…、泣きそうです。

「あれ？光かぁ？」
センチメンタルな俺に、後ろから声が掛る。
「あっ、武…久しぶり。」
そこには、すっかり江戸村に馴染んでいる武の姿があった。
江戸村の衣装を自分流に着こなし、長い金髪は上の方で纏められて
いる。
周りを数人の厳つい男たちに囲まれ、すっかりヤクザの雰囲気醸し
出している。
これ…、知り合いじゃなかったら、絶対声掛けないな。
「なんだよ光、何凹んでんの？」
「いやぁ、それが…。」
久しぶりに話しの分かる相手に会った俺は、今までの経緯を武に話
した。
近くの飯屋に入り、二人だけで酒を飲んだ。

「ふーん、徳さんねぇ…聞いた事ねぇーな。そんな目立つ侍なら俺の耳に入ると思うが？」
「そっか…。俺…どうしたら良いか分かんねーよ。」
「…でも、ここで待つしか方法ねぇーんだろ？」
「そうなんだよなぁ。祥さんの方に来たら連絡あるだろうし。」

「んー、っ…よし！俺が手伝ってやるよ！！」
「…えっ？」
突然の武の申し出だった。
武が手伝ってくれるって…一体何を？
「徳さん見つけても、周りを侍達が守ってんだろ？俺に任せろよ！！」
ガハガハ笑いながら話す武は、すっかりヤル気になっている。
俺…本当は円満に解決したいんだけどなぁ。
「あの…、僕は円満的解決が出来た方が嬉しいんですが？」
「分かってるって！あくまでも俺はボディーガード！」
「まぁそれなら。でもさ、何で俺の手伝いする気になったんだ？お前そんなに暇なのか？」
「…聞いてくれよ。おれさぁ…。」

武は、よくぞ聞いてくれました！とばかりに話し始める。
武は新八に気に入られヤクザの客になった訳だけど、
この所毎日ある事を勧められ、武はウンザリしているらしい。
それは…、新八の娘と結婚みたいだ。
「俺さぁ…、女は好きだけど結婚とかって…無理じゃねぇ？」
「まぁな。お前…家庭向きでは無いよな。」

武なんか婿に貰ったら、奥さんは大変だぞ？
「…お前、何か勘違いししてねぇ？」
「何が？」

「だから、俺は結婚が嫌なんじゃなくて、結婚自体しても無意味だろって言ってんだよ。」
「…無意味？」
「お前…まさか、花菊って女とマジで結婚してぇとか思ってんの？」
「…いや、だってしょうが無いだろう。」
「しょうが無いって！お前…元の場所に戻る気は無いのかよ。」
「元の…場所？」
「東京だよ。日本国の東京…歌舞伎町だよ！まさか諦めた訳じゃねぇーよな？」
「…まっまさか！俺だって元の世界に帰りたいよ。」
「…ならいいけど。俺は元居た場所に絶対帰って見せる。それだけは忘れんなよ。」
武はグイッと酒を飲み、俺も続いて酒を煽る。

ちょっと忘れかけてた。元の場所に戻りたいという気持ち。
この世界で生きて行く事ばかり考えて…大切な事忘れてた。
なにも一方通行って訳じゃ無いだろうし、帰る方法は必ずある筈！
（多分）
そうだよ…今やってる事は、金を稼ぎ、何時か来るその日まで生きている為の手段！
本気になっても無意味。
…逃げちゃおうかな？…嫌、祥さんに迷惑掛けるだろうし…麻美の事も気になる。
とにかく金の為にも麻美の為にも…俺に出来る精一杯の事を頑張るしかない。
そうだよ…、落ち込んでる場合じゃない！！

「…武、頑張るよ俺。」
「あぁ？…まぁ、頑張れよ。」

ちっ、武なんかに励まされるとは！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7285n/

江戸前ホスト

2011年1月30日17時14分発行